筑前琵琶歌註釋

尾編

11
537

始

筑前琵琶歌註釋 壹編

伊賀の曙 伊豆の御巫
泉の三郎 稲村ヶ崎
石童丸 六代君 上下
鉢の木 芳流閣
羽衣 哈爾賓の露
錦の御旗 佛御前 上下
本能寺 葬の内侍
虎御前 知盛
千早城 筑後川

11
537

11-537

宮内省

樞密顧問官
子爵 金子堅太郎閣下題字

筑前琵琶歌註釋

壱編

大正
10 12.28
内交

煙心

漢石

緒言

誠を以て筑前琵琶を愛し、愛を以て筑前琵琶を究め、力を以て筑前琵琶を推さむと欲するは、同人の等しく庶幾する所なり、而も之を愛し、之を究め、之を推さむことを欲する者は、筑前琵琶の歌と親しみ、最も能く之を知るより先なるはなし、蓋し、歌詞の組織、風尚、史實、釋文等、悉く我有に歸するに及んで、始めて筑前琵琶に對する、愛好、練磨、推崇の情念躍出するに至るべし、吾人茲に見るあり、乃ち早川紫陽先生に請ひて、筑前琵琶歌註釋の上梓を企てたる所以なり、同好の諸氏、此書に就きて自得せば、我筑前琵琶の特色益發揮し、その伸展向上期して待つべきのみ。

大正十年十二月

橘　旭　翁

筑前琵琶歌註釋目次

第壹編

伊賀の曙……一
伊豆の御難……一〇
泉の三郎……一七
稲村ヶ崎……二四
石童丸……二九
六代君（上下）……七
鉢の木……五一
芳流閣……五八
羽衣……六四
吟爾賓の露……七〇

錦の御旗……七
佛御前（上下）……八
本能寺……九
辨の内侍……一〇三
虎御前……一一〇
知盛……一一五
千早城……一二
筑後川……一二八

伊賀の曙

本歌曲は世間に流布せるものと多少異なる處あり即ち通俗にては又五郎に殺されたるは數馬の父靱負とせるも本歌曲にては弟源太夫に作れり其眞僞何れなるやを知らずと雖今便宜の爲めに通俗の傳説を以て説明する事とせり

因幡國鳥取の城主池田宮内少輔忠雄侯の臣渡邊靱負は名刀正宗の事より河合又五郎の爲に殺害さる而して又五郎は幕府の旗本阿部四郎五郎の邸に投じたれば當時旗本と諸侯との軋轢酷しき時とて阿部の依頼に因りて旗本數十人糾合して飽く迄又五郎を曲庇たれば池田家も亦諸大名に謀り既に大事に及ばんとせしが忠雄侯の遊去となり一方旗本も其儘又五郎を隱匿すること能はざる境遇となりて無止一流に達したる劍客三十六人を以て護衛せしめ九州人吉に送らんとせり然るに靱負の實子渡邊數馬は俱不戴天の父の仇を報せんとするの念切なるも到底獨力にて及ばざるを知り義兄即ち姉婿荒木又右衛門吉村に助太刀を請ひ遂に伊賀國上野城下に於て寛永十一年十一月二十七日朝復讐を果したり荒木は柳生重兵衛光嚴の高弟にて當時天下無双の達人なりしと云ふ荒木の碑は鳥取に在り碑銘には荒木又右衛門吉和と錄せり

●弟源太夫の讐敵とあるも通俗にては父親貞の仇なりと云ふ

●『庇護』たすけまもること、いたはること

●『時機』適當の時節

●『極意』おくの手なり奥義に同じ

●『達人』技術の達したる人

●『悠々』落ち付きて急かぬ貌

●『驛路の馬に跨りつ』昔は數里毎に驛あり之に人足あり荷扱ても備前岡山の城主弟源太夫の讐敵川合又五郎を當時の麾下矢部四郎五郎等數馬は義兄荒木又右衛門に頼り抑も荒木又右衛門保和は二天流の奥義を宮本無三四に授かり其の名洽く聞えけり霜月七日の朝まだき鍵屋が辻の茶屋蔭に踏みしだかせつ悠々と松平忠雄の家臣渡邊數馬は謀り討たんと狙ひしも妄りに又五郎を庇護ければ復讐の時機をぞ窺ひける柳生流の極意を柳生十兵衛に學び二流を兼ぬる達人とて時こそ來れ寛永十一年伊賀の上野の町はづれ待つ人ありともしら霜も驛路の馬に跨りつ

馬ありて行通を便にせり其の馬に乘つてといふことなり

●『不義の奴輩』人を殺したる如き者を授ける義理を知らぬ人間といふことなり

●『半弓』弓を大弓と稱するに對して半弓と云ふ凡そ大弓の半分位の長なる弓なり

●『乙矢』弟矢に同じ矢は一手二本なり二番目に放つ矢を乙矢と云ふ

●『前輪』鞍は馬の脊に置く具にて前方の山形の如き部分を前輪と云ひ其後方に在るを後輪と云ふ

ゆられながらに近寄るは斯る行方に荒木又右衛門遮出で我は義に因りて弟數馬の助太刀なすぞ川合又五郎に助力せよ驚きながら櫻井甚助荒木を目蒐け發矢と射る左劍を揮つて打拂ふ右劍にテウと斷落し馬の前輪に切付くれば起しも立てず又右衛門又五郎の一行三十六人なりヤア珍らしや櫻井兄弟爾等不義の奴輩はいざ尋常に勝負〳〵と呼はつたり半弓取り出し矢を番へ心得たりと又右衛門續て放つ乙矢をば飛鳥の如く走せ寄りて甚助堪らず撞と落つ甚助が首打落す

●『二天流』宮本武蔵が創めたる撃剣の流義なり、右手に長剣左手に短剣を持つ依つて二天流と名付けしと云ふ

●『槍の蝶首』槍は北條氏の終期頃より始まり上代の鉾の轉化したるものにて身と柄より成り長さ六七尺より三間半に及べり槍の穂先の柄に接したる所を蝶首と云ふ

●『裕かに』ゆるやかに急かぬ貌なり

此有様に櫻井甚左衛門苛つて槍を打扱き弟の敵と突きかくるを何を小癪と又右衛門二天流の早業にて槍の蝶首斷り放ち手許へヒラリと飛込みつ甚左衛門が肩先バラリと斬下たり此時御城の方に鳴り響く太鼓の音もどう〳〵と繰り出し來る一群の大將ならむ老武者は槍を小脇に掻込みつ仕合の場所に馳せ來り馬上裕かに聲高くヤア〳〵其れなる方々承はれ我は藤堂家の家來梶原源左衛門也御當家の掟として仇討は當人同志助太刀は各一騎打ち

●『卑怯未練』卑怯は物事に恐るゝ事臆病なり未練は心殘りしてあきらめぬ事、いやしい振舞せずして正々堂々と勝負をせよといふことなり

●『酒井武右衛門岩本孫右衛門』通俗に北堂武右衛門山添伊兵衛と云ひ共に渡邊數馬の家來なり

●『中段』槍術劍術等に上に構ゆるを上段と云ひ下に構ふるを下段と云ふ其中間に身構へするを中段と云ふ

卑怯未練の行爲あるべからずと最と嚴重に申渡し周圍をヒシと警固たり斯と見るより又右衛門數馬に出でよと麾ねく合圖に應じ渡邊數馬は酒井武右衛門に岩本孫右衛門を隨へ出で川合又五郎は何處にあるぞ疾く〳〵出會ひ勝負せよと大音聲又五郎は悠然と馬より下り禪十字に綾なしつ豫て準備の槍押取りイザとばかりに立對へば數馬は太刀を中段に構へ兩人睨み合うてぞ挑みける彼方に在りては又右衛門種田五郎兵衛鷲塚取五郎鳥海次太夫等を斬て捨てホッと一息する間なく

●『鬱憤』つもり〳〵しうらみを云ふ

●『蹴鞠』革にて作りたるまりにて足を以て蹴上げて遊戯に供するもの

ヌッと出てたる大入道　色飽迄も黒く眼中鋭く
虎髯振立て鰐口開け　ヤア又右衛門記憶もあらう
我こそは竹内玄丹なり　日頃の鬱憤晴して吳んと
天秤棒の如き大太刀を　翳してサッと切かくるを
空に打たして又右衛門　左劍に拂ひ右劍に切込み
暫時の猶豫も吳れざれば　流石の玄丹持て餘まし
後へ〳〵と退却りゆく　此處ぞと附入る又右衛門
太刀風烈しく玄丹の　二の腕さつくと斬り落し
右劍にエイと打拂へば　機勢を受けて坊主首
蹴毬の如く飛んだりける　此勢に怯ぢ怖れ

誰も後退する處に　穴澤流の薙刀提下げ
星合團四郎と名乗掛け　荒木の前面に進み寄る
又右衛門は兩刀の血振ひして　いざ來れと身構へたり
双方共に劣らぬ勇士　勝負の程も見えざりしが
如何なる隙かありつらむ　抄ふが如き又右衛門の
左手の冴に星合の　右手諸共に薙刀を
バラリと地上に打落し　ひるむ處を唐竹割
血烟立て〻倒し〻は　眼覺ましかりける有樣也
是より荒木は高柳一劍齋　同じく武八郎等を討平らげ
心にかゝるは數馬が身と　宙を飛んで走來れば

●『後退』跡躊して追み乘れたる形なり

●『びるむ處』よわる事

●『唐竹割』幹竹を割る如く上より下に眞直に二つに切り割る事

●仇討ち當人同士の皆なれば荒木は助太刀の者全部を討取りて此場に來りたれども數馬に助太刀するを得ず故に口の助太刀即ち應援を爲せり邊人の助言は大に効ありと云ふ

此方は川合又五郎と今や勝負の眞最中しかも數馬は受太刀にて最とも危き際なればヤア數馬後れを取るは何事ぞ荒木は聲を勵まして一人も殘さず斬捨たり我は助太刀の奴輩を大音上げて呼はるにぞそら其處擊てやと横合より數馬はヒラリと飛入りて川合は驚き振向く時尚二の太刀にて肩先より又五郎の小手先バラリと斬り倒れし上に乘し掛り肋へかけて斬下げたり時しも昇る朝日影止めの一刀刺し通しけり日本晴の仇討と山の端高くかゞやきて

●『伊賀城』伊賀國上野の城にて藤堂家拱持の城

皆一齊に歡喜の聲を上げつゝ勇ましく伊賀城さしてぞ引揚ける心地よかりし次第なり

伊豆の御難

日蓮大士の父は貫名重忠母は清原氏貞應元年二月十六日を以て安房國長狹郡小湊浦に生る幼名を藥王丸と云ふ十二才にして同國清澄山に上り僧道善に師事し十八才薙髪して蓮長と稱へ眞言宗を修ひ後ち鎌倉に出で又比叡山に登りて修學し失より五畿内紀伊等の諸大寺に就き專ら各宗の蘊奥を究め傍ら和漢學をも修めて大に一家の見識を具ふるや建長五年故山に歸り清澄山にて法莚を開き七字の題目を唱へ諸宗を謗る爲に反對を受けて鎌倉に去り松葉ヶ谷に草庵を營みて日々法華經を讀誦し時に街頭に出でゝ布教に力め併せて念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊と喝破して各宗を罵る之が故に憎惡を蒙る事甚だし此時に方り連年天災頻りにて五穀登らず細民飢餓に苦む日蓮は之れ皆謗法の罪なりとし上書して意見を陳ぶ鎌倉幕府は其言辭の矯激なるを忌み誑惑罪として文應元年伊豆國伊東に配流す本歌曲は官船の解纜に際し門下日朗以下の訣別を悲しむ所なり

●『妙法の花』たへなる佛法の華と云ふ意、法華經より出でたり

●『永久』永くかはらざる事、永くつゞく事

妙法の花咲き出でゝ永久に　一念三千の園清く
實相眞如の月すみて　無明の闇を照らすらん
さても日蓮上人は　金剛不壞の妙體に

●『一念三千』吾人の一念中には三千の法界を具へたり其法界の清淨なるを云ふ

●『實相眞如の月』實相とは眞如の義なり要するに悟りを開きたる境界を云ふ月の一點曇り無きが如く迷ひの雲を去て自性眞實の體なり

●『無明の闇』無明は明光なく闇き意邪見妄執の中に在りて法界を了ぜざるを云ふ即ち惡業煩惱にひかれて闇路に在る如き衆生を彌き照らすと云ふの意なり

●『金剛不壞』金剛とは堅固にして破れざる義又無明を照破するの義なり、不壞とは極めて堅固にしてやぶれざる事なり

●『折伏弘通』敵を折きて我折伏弘通の鉾とぎて　今は諸宗を切り靡け
關八州の僧俗も　御法の雨に沾ひけり
茲に北條陸奥守重時は　讒者の言に與しつゝ
いたくも大士を憎めども　世を捨人の詮方なく
齒がみなしてぞ居たりしが　執權時宗幼少くして
子息長時代って輔佐となりしかば　これぞこよなき機なりと
私に長時を語合つ　時しも弘長元年の
正月も中の五日の朝　琵琶の小路に召捕へ
情容赦もあらぬ涙や　由比が濱邊へ引立てゝ
伊豆へ流罪と聞えけり　荏原池上秋本の

に従はしむる事を折伏と云ふ即ち他宗の人を說き伏せて我法を弘く廣むるの意なり

●『諸宗』佛教の宗門は當時も八宗あり現今も然り之等の宗門を指す

●『識者』ざんげんする者

●『大士』高德の僧を云ふ

●『世を捨人』主に僧侶の事に用ゆ

●『輔佐』たすける人後見の如し

●『こよなき機』此上なき機會と云ふ事

●『語合』相談して、はなし合ふてと云ふ事

●『琵琶』の小路『鎌倉』に在り

●『由比が濱邊』鎌倉の附近に在り

檀徒の面々驚きて我も〳〵と馳せあつまり十重二十重にも取圍み互に罵り犇めけどはや嚴重の縛めに警固の兵捧うち等四邊へ人を近つけずかゝる折しも日朗は比企ヶ谷にありけるがかくと聞くより徒跣足宙を飛んで走せ來るはや出船と見えければかよわき腕もて纜をとかせもあへず縋りつき我こそは日蓮の弟子日朗にて侍るなり我も流人と諸共に所詮遁れぬものならば聲を限りに叫べども同船させて給はれと

●『檀徒』檀家の人々歸依せる人

●『警固』非常を警めて防備する兵士

●『纜』船をつなぎ止むる綱

●『無情の舟夫』無情はなさけ心の無いつれない事舟夫は船を使ふ事を業とする人

●『青道心』なま若き僧侶

●『渚』波打際なり

●『會釋』あいきつする事

もとより無情の舟夫なれば怒りの聲も荒らかにヤオレ控へよ青道心コハ御用船なるに邪魔なさば目にもの見せて吳れんぞと持つたる櫂を振りかざしハッシと許り打つたりけりかよわき日朗の事なれば何かはもつて耐るべき一聲アット叫びつゝ磯の渚へ打ずゑられ其儘撞と倒れけり日蓮大士は斯くと見てツト船端に立ち上り如何に官人の衆中に物申さん彼は幼少より我弟子にてしばしの間だに我側を離れぬ不憫の者ぞかしあはれ一言暇をば告げ得させよと會釋して

●『血の涙』甚だしく泣く時の涙を稱す
●『教化』導きて智を開き善をすゝむる事
●『末法』正法千年像法千年末法萬年と云ふ既に釋迦入滅後二千二百年を經たる當時なれば末法と云へり
●『金言』貴重なる言葉格言と云ふに同じ
●『廣宣流布』水の流れ布ゝ如く廣く宣べ弘まる事
●『赦免』罪をゆるす事
●『自愛』自ら自分の身を大切にする事
●『八重の潮路』潮路とは波頭の段々に重なるにより千重とか八百重とか八重とか潮路の枕詞とせり要するに遠き潮路と云ふ意なり
●此經難持若暫持者、法華經寶塔品第十一偈文の終りにある一句なり、此所にては、此經を持つことは難いが若し暫くも持つ者は、といふだけに過ぎぬが即ち是の如き人は諸佛も嘆めたまふ所なりといふ文句が續いてあり要するに此の文

倒れし此方に打向ひ日朗〳〵と聲高く誠をこめて呼びませば其慕はしき御聲の耳に入りけん日朗は痛手に惱む身を起しアヽ懐かしや嬉しやな御船は未だ出でざりしか妙法蓮華經と合す手も右は折られて片腕あげてなき入る血の涙他所の見る目も哀れなり大士は御眼をしばたゝき如何に日朗日頃の教化を忘れしか今末法にありながら娑婆に御經を弘めなば杖もてうたれ或は又遠く流罪となりぬべしあはれ法華經に説かれたる

金言鏡の如くなり廣宣流布は疑ひなしやがて赦免の時を得て再び巡り逢ふまでは法の御爲め自愛せよ此地と伊豆とは西東八重の潮路の遠ければ日東天に昇りなば日朗鎌倉にありとしる日西山に入る時は日蓮伊豆にあるぞかしさらばと許り念珠すり此經難持若暫持者と寶塔品の偈文をば聲も清らに唱ふれば御船は波にゆられつゝ一聲高く又低く波のまに〳〵遠ざかり沖合遙に漕ぎいでたり哀れなるかな今はしも

句を節し唱へたといふ意なり
●『偈文』偈は梵語にて佛の功德を讃美するに謠ふ一種の詩なり
●『歸依』歸は歸投也依は憑もなり大覺に歸投し正法に歸投し出家に歸投する事要するに信仰して我生命をも其ものに托する如きを云ふ
●『朝霧』もやは空中に生ずる大氣にて霧の如きもの夏はもや又は虎落と云ふ
●『沖中節』當時上人が船中にて唱へられたる讃經の節を取つて名づけたるものなり

御弟子や歸依の老若等　仇浪ならぬ磯際に
袖しぼりつゝ見るうちに　潮風吹立つ朝靄に
御船は見えずなりにけり　日朗始め御弟子等は
名殘の更に忍ばれて　船にきとゆる此經難持
おのづ節なす御經を　このまゝ胸に唱へつゝ
沖中節と今も世に　傳へて語るぞありがたき
傳へて語るぞありがたき

泉の三郎

逵邑玉蘭作

一世の英雄源義經は神出鬼沒の戰術を以て木曾を平らげ平家を滅ぼし功名赫々天下に秀でたれば猜疑心深き舍兄賴朝の忌憚する所となり加之梶原景時の讒言に乘ぜられ遂に兄弟相鬩ぐの慘境に陷り辛ふじて奥州に潛行し豪族藤原秀衡に倚る時に元暦三年なり秀衡は田原藤太秀郷の後裔にして累代聲望あり且義氣あるを以て新館を營みて之れに置き頗る義經を好遇す同年十月二十九日秀衡病歿し泰衡の相續するやゞ父の遺命によりて良く義經に仕ふ賴朝之を聞き屢々密使を派し甘言を以て泰衡を誘ふ泰衡遂に心を動かし同胞を集めて其向背去就を決す秀衡の三男忠衡獨之を肯んぜず先考の遺命を主張し席を蹴て退ぞく泰衡等は依て先づ忠衡を討ち而して義經に及ばんと欲し平泉の館を攻めて忠衡を滅ぼせり平泉は陸中國磐井部平泉村に在り館趾は方三町許りの小砦なりし由にて今は田圃に變じたりと云ふ

●『敵營を蹂躙し』義經が鵠越を下りて平家の陣營をふみにじりたるを云ふ蹂躙はふみあらす又ふみにじる事にて雄威を振ひて打碎きたるを以てかくの如く云へり

鵠越に敵營を蹂躙し　壇の浦に平家を殄滅し
赫々たる武勳世に比肩なく　軍神と稱揚されたる
九郎判官義經も　蝸牛の双角のいさかひに

●『殄滅』ほろぼしたやすことを云ふ
●『赫々たる武勲』赫々とはあきらかなるさまにてきらめきかゞやくと云ふの意
●『蝸牛の双角のいさかひに』莊子に曰く、蝸の左角に國あり觸氏と曰ふ右角に國あり蠻氏と曰ふ時に相與に地を爭ふて戰ふと此場合は兄弟互に爭ひするを云へり
●『天資豪邁義俠』天資はうまれつき又はしやうとくなり豪邁は心たけくすゞれたること義俠は男らしき事
●『遺言』臨終の時に言ひ殘す言葉
●『甘言』人の氣に入る樣にうまい言葉にて欺むくこと

止む無く都を出汐やみちの奥なる秀衡に信憑る事とはなりにけり爰に秀衡の三男にて天資豪邁義俠にして泉の三郎忠衡は父秀衡が逝去の後忠孝無二の勇士なれば義經に厚く事へ奉りたり固く其遺言を打守り屢密使を奥州に下し去程に賴朝秀衡の病歿を聞き忠衡の長兄泰衡は義經を討たしめむと謀りしかば去就をこゝに決せむと遂に其甘言に誘惑され頃は文治五年四月中旬思ひ起しぞ淺間しきまがふばかりの卯の花のまだ消え殘る雪かとも

●『去就』去ると止まると背くと從ふとどちらに就くかを決すること
●『まがふばかりの卯の花の』卯の花は數種有り人家の籬根に栽るものは山空木なり木の中空なるを以て空虚木と名づく高さ一丈ばかり陰暦四月比小さき白花開いて簇をなす籬根に添ふて白く簇がりて咲く故消え殘る雪と見まがふばかりと云へり
●『同胞』同腹の意にて兄弟姉妹にも通ず
●『遺命』死際の言殘し遺いひつけなり
●『鮮色激しく』言葉づかひも顏色もはげしく勢ひすごきこと
●『嗟嘆』なげくこと

垣根繞らす柴の戸に五人の同胞寄り集ひ密議に首を鳩めたりやゝありて忠衡は泰衡等に打對ひ今日の事唯父の遺命に從ふのみ又何をか議し何をか策らむと辭色激しく言ひつれ共輙く容れらるべうも見えざれば忠衡大に嗟歎しつ吁嗟六親不和にして三寶の加護なしとかや況して先考の遺命に背き館に害を加へむ如き不孝不義に與せむはは吾等が決して爲し能はざる所なりはや御暇賜り申さむとおのが居城の平泉に歸り行くこそ勇しけれ斯くて殘る四人の兄弟は賴朝に從ふ議に決し

●『六親不和』六親は親、子兄弟夫婦を云ふ不和は一致せぬ事中の良くない事

●『三寶佛寶、法寶、僧寶を三寶と云ふ佛語なり

●『先考』亡父、子より稱ふる語此場合は秀衡を指せり

●『館』高館殿にて義經を指す

●『不意の襲撃』思ひも寄らぬ攻撃さること

●『衆寡』大勢と小勢を云ふ衆寡等け三千餘騎なれど忠衡は円意無き故頗る小勢なり

●『搦手』城砦等の裏門を云ふ

先づ忠衡を討ち義經に及ばんと俄に三千餘騎を催して平泉城に押寄せたり素より不意の襲撃なれば忠衡如何に豪勇なるも衆寡の勢敵し難く味方逐次に打死し殘兵僅二十餘騎今や最後と見えたりけりかゝる所に搦手より栗毛の駒に打騎りてみどりの髪を夕風にくしけづらしつ紅の血汐したゝる薙刀を左手に抱へ馳せ來るは是三郎が妻佐藤氏なり良人の馬前に駒を留め今一度今生にて郎君と和子に會はまほしく漸く一方切り開らき

◎『恩愛』めぐみいつくしむこと

こまやかなるなさけ

●『斷腸』はらわたを斷つ如く極めてかなしむこと

●『忠信』義經敗敗の臣佐藤忠信にて吉野山に於て義經の身代りとなり忠死せり

●『昂然』氣があがる事たかぶること

●『など』何故に、何とてと云ふに同じ

●『貞節』女の操、貞しき操を云ふ

●『頑是なき』何事も知らぬ罪のないと云ふ意

●『和子』小童の美稱

未練ながらも遁れ歸りて候と眞情を洩らす村時雨流石に猛き忠衡も今は是非なし去りとてもしのぶにたよりありぬべし妻は昂然之を卻けつ聞くも却々恨めしや貞節堅く義氣に富む左らば共々打死せむあの和子殘すも心苦るし

先立ものは恩愛の戎衣の袖に降りかゝる斷腸の涙に咽びしが卿は忠信の妹にて疾く〳〵落ちよと勸むれば今際に至りかゝる仰せなど諸共に死ねよとばしは宜はずやと言葉に忠衡感じ入りしかはあれ共頑是なき寧ろ吾等が手に掛けて

後世の迷妄をはらさむと寢入るみどり子抱上ぐれば
殺さるゝともしら露か名殘の雨に眼を覺し
ほゝゑむさまの愛らしさいかで双のあてらるべき
しばしためらふ時しもあれ敵兵間近く寄せつれば
最はや詮方なく〳〵も震ふ腕に力を籠め
グザとばかりに刺し殺す親の心や如何ならむ
無慘といふもおろかなりやがて忠衡妻諸共
重圍を破り縱横無盡敵を四方に薙ぎ散し
城に歸りて火を放ち刺交へてこそは死したりけれ
今もむかしの跡訪へば袖に涙の湧き出でゝ

●『無慘』いたはしきこと
●『縱横無盡』たてよこ自由自在に切りまくること

盡きぬ泉の三郎が むすぶ妹脊のいさゝ水
涸れけむ後も北上の ながれと共に末かけて
青史に美名を留めけり 青史に美名を留めけり

●『むすぶ妹脊』妹は女、脊は男にて主に夫婦の緣筋に用ふむすぶは泉の掬ぶと夫婦の緣とをかけたり
●『北上』奥州第一の大河北上川なり
●『青史』歴史の事なり

稲村ケ崎

鎌倉の執權職北條高時（入道崇鑑）は累代の餘威を振ひ頗る横暴なり殊に忝なくも後醍醐天皇を隱岐國に遷幸し奉りしより勤王の志士所在に奮起し就中河中國金剛山千劔破城の守り固く北條氏百萬の大軍も遂に攻拔く事能はず新田太郎義貞は此寄手の軍中に在りしが密かに綸旨を奉じ病と稱して故國上野に歸り元弘三年五月八日義兵を擧げ武藏國を經て長驅相模國に攻め入り三方より鎌倉を攻む同月二十一日の夜半に義貞は片瀨・腰越等を打廻り稲村ケ崎を望見するに敵は大船數十艘を竝べて横矢を射るの準備をなし而も海潮漫々として漲りければ義貞馬より下り甲を脱ひで海上を拜し龍神に祈誓して自己の佩用せる金作りの太刀を拔て海中に投ぜり龍神も感應納受せしか其夜の明け白む頃より稲村ケ崎の灣頭二十餘町干灣となり横矢を射んとせし船も汐に退かれて遙の澳に漂泊せしかば義貞六萬餘騎を以て稲村ケ崎の遠干灣を眞一文字に馳け通り鎌倉中に亂入し翌二十二日北條氏を滅ぼせり稲村ケ崎は相模國鎌倉郡極樂寺村海岸に突出し其形狀恰も稲を積みたるが如し故に名づく從前舊蹟なりしも新田義貞の鎌倉攻め以來益々其名著はるるに至れり

●『苅菰』眞菰を刈る時はみだれやすきものなり故に世の中の亂れなどに冠する詞となれり

●『龍頭の光』兜の前立鍬形の立物とすたつがしらなり義貞の冠りたる兜の前立なり

●『切通』地名

●『楯』楯は數種あり主に櫓、樽等の木にて作る此場合に用ふるは長四五尺幅二三尺の厚き板を掻き列べて矢を防ぐ戰場の用なり

●『逆茂木』鹿の角の如くなる荊棘の枝を寄せて藤を結び以て敵を防ぐ用とせるものなり

●『櫓』矢倉なり矢臟なり此場合は船の上に高き櫓を設け敵勢を即ち新田勢の海を渡る所を横よゝ射る爲なり

世は苅菰か五月雨の定め方なき雲井より
僅かに洩るゝ月影を便となしつ押寄する
總軍勢の大將と夜眼にも著き龍頭の光
打かゞやかし義貞は駒を磯邊に立させて
左右を顧み仰けるはあれ視よ北は切通まで
山高うして路嶮しく特に木戸を構へ楯を掻き
南は稲村ケ崎の浪打際迄逆茂木繁く引懸て
沖四五丁に連なれる數多の兵船櫓を上げ
横矢に射させんと構へたり實にや昨日向ひし我軍の
進み兼しも道理なり此の要害を破らむは

●『要害』地勢險絶にして敵を防ぐに便利なる所を云ふ
●『天佑』天道のたすけ
●『大君』至尊の尊稱
●『龍神』水を司どると云ふ海神のこと
●『一天萬乘』一天下を知ろしめす天皇を云ふ孟子より出でたり
●『憤慨』いきどほりなげく事
●『斧鉞』たの、まさかりにて鉞は大なり鉞は小なり古の戰具今は武器を帶びたるを云ふ
●『微忠』わづかの忠義の心といふ事なり
●『三軍』軍隊の前鋒中堅後拒又は左翼中軍右翼等を云ふ或は全軍の稱ともなれり支那の周時代に起りたる名稱なり

天佑なくては敵ふまじ　イデ〳〵我は大君の爲め
我眞心を龍神に訴んと　岬に聳る嚴が根に
いと易げにも攀登り　兜を脱ぎて恭しく
遙に海上を伏し拜み　今一天萬乘の大君は
逆賊北條高時の爲に　西海の浪に漂ひ給ふ
臣義貞憤慨に堪へず　斧鉞を把て賊を討んとす
仰ぎねがはくは龍神　義貞が微衷を憐れみ
潮を萬里の外に退て　道を三軍の爲に開かせ給へと
聲高らかに祈りつゝ　黄金裝の太刀を捧げ
ザンブとばかり海中に　投入れ給へば龍神も

●『受納』受け納めてと云ふ事納受と云ふも同じ
●『詩の大意』黄金製の寶劍を波の中に投げ入れて物々たる忠義の心を海神に訴へた其精神が通じて怒濤の潮が衝き滿ちて來るか退けた容易に鯨鯢（共にくじらと見て可なり）を獲たるは怪むに足らぬ直に海若（海の神）を驅り催ふし先鋒とした云ふ意味にて義貞が稻村ヶ崎を越えて直に鎌倉を滅ぼしたる事を稱揚して浩堂と云ふ人の作りたる詩なり
●『靈驗』神佛の不思議なる感應を云ふ

其至誠をや受納したりけむ　曉ちかくなりしとき
潮俄かに干上りて　横矢構へし兵船も
落行く汐に誘はれ　遙の沖に退きたり

寶劍投波訴忠憤　精誠爲退怒潮衝
輙獲鯨鯢何足怪　直驅海若作先鋒

義貞喜び三軍を麾き　神も感應まし〳〵て
充ちに滿ちたる汐路だに　徒渉るべくなりつれば
今日の戰も勝なるぞ　すゝめ〳〵と大音聲
いま目前現はれたる　世にも不思議の靈驗に
驚き勇む數萬の軍兵　一度に揺と鬨を揚げ

●「直押」しやにむにおして行く事

●「津波」海嘯にて巨大なる波浪が不時に起りて陸地を浸すこと

●「俄」に渡りて攻寄せたる義貞の大軍を形容す

●「誅戮」「誅」は罪惡あるを討つ事「戮」は死刑、刑罰等を意味す

●「建武中興」後醍醐天皇隱岐國より還御あり翌年改元ありて建武と年號を改めらる鎌倉の政權を收め政令一途に出るに至りたれば之を建武の中興と云へり

鎌倉指して驀地唯直押に押し行くは
先に退きてし大潮の津浪となりて寄返す
狀とも見えて凄じやこの一戰に義貞は
逆賊高時を誅戮し建武中興の大業を奏しけり

石童丸

石童丸は其事蹟の徴すべきもの無く殊に石動丸と云ひ石童丸と云ひ石堂丸と云ふ何れか是なるを知らず今古來書き傳へたる苅萱發心記に藉りて之を解說す

九州の豪族松浦家に重賴と云ふ人あり庶長子は幼名を藤千代と云ふ故ありて老臣加藤左右衞門尉春好之を養嗣子とし長女を配す藤千代元服して加藤左右衞門尉重氏と稱す實父重賴死して本腹の大內助松浦家を相續す頗る暴戾なれば重氏數々之を諫むれ共用ひず而して重氏の養父母も相繼で死去したり彼此の動機にて重氏は飄然として故郷を去り京都新黑谷の叡空上人に就きて出家す時に齡二十一才なりと重氏の去りて後は知行をも沒收されたれば妻女は長女千代鶴を伴ひ姙娠中の身を以て筑前國苅萱の關附近に住し男子を分娩す石童丸之なり幾星霜を經て偶〻京都に往復する商人より重氏の出家委を新黑谷の附近にて見たりとの風聞を得當時十二才の石童丸と共に京都に赴く長女千代鶴十四才共に行かん事を請へども貧苦の中とて餘裕なければ近隣の人に托して母と石童丸と旅立したり初め京都に至りしが重氏の道心坊は既に去て高野山に入りたれば母子は跡を慕ひ之に行きしに高野山は上乘瑜珈の靈場とて女人の垢穢を嫌ひ女人結界の山なれば母は登山する事を得ず麓の玉屋と云ふに殘し石童丸は三日の時日を約し山に上りて處々を尋ねたる末偶然逅遇したる僧に問ふ僧曰く曾に今道心にては分明ならず參詣の道八ケ所歸る道三ケ所あり之に俗名を

認めたる札を立つべし心當りの人尋ね來らんとて己が庵室に伴ひ歸り俗名を聞て大に驚く然も一旦の誓ひを破らずして遂に名乗らず石童丸は凄々麓の宿に歸れば母は死亡し居れり復び山に上りて道心坊を請じて之を葬り單身筑前の故郷に歸りたるに姉千代鶴は死して初七日に當れり遂に復高野山に上り道心坊に就て出家し二年を經て道心坊は行脚僧となり信濃國善光寺の邊にて死せり石童丸の道念坊も遂て之に至り道心坊の佗住たりし庵室にて行ひ澄し建保二年八月二十四日に六十五才にて往生を遂げたれば時人之を哀み親子地藏に祭りたりと云ふ

●『月に叢雲花に風』叢雲は集りむれたる雲にて月は皎々と光るものなれど浮雲來りて光を蔽ふ花は咲き盛れども風來りて散らす即ち人生の果敢なきに比して云ふ

●『探題守護』探題は一地方の事を掌どる職にて北條氏執權の頃より京都、長門、陸奥、筑前等の要處に置たりと云ふ

●『婆婆』忍土とも云ふ苦勞多き

月に叢雲花に風散りて果敢なき世の習ひ
筑前筑後肥前肥後大隅薩摩六ケ國
探題守護を司どる加藤左衛門重氏は
婆婆の無常を感じつゝ故郷に妻子を殘しおき
諸國修行と出で給ふ實に光陰は矢の如く
十、年あまりも早過て石童十四の春の頃

現世の事を云ふ

●『諸國修業』菩提を弔ふて諸國を修行しあるく即行脚僧なり

●『光陰は矢の如く』光陰は晝を光と云ひ夜を陰と云ふ歳月の事なり歳月の流るゝは早くして矢の如しと云ふこと

●『靈場』高野山一靈場はあらたかなる地高野山は紀伊國伊都郡にあり弘法大師の開かれたる靈山なり

●『禁制』いましめとゞめてある事此場合は女人の高野山に登る事を止めてある事

●『善惡二つの分け柳』善人が見れば柳に見ゆれども惡心の人が見れば蛇の如く見ゆると云へり

父は高野におはすると風の便りに聞きしより
母もろ共に立ち出でゝ慣れぬ旅路もいとひなく
軈て紀州に着きにけり茲に靈場高野山
弘法大師のいましめに女人の登山は禁制なり
されば石童本意なくも母を麓に殘しおき
東雲鳥と諸共に杖を力にのぼりゆく
鳥も通はぬ屏風岩善惡二つの分け柳
三鈷の松に五鈷の杉通り過ぐれば峰藥師
無明の橋にかゝる時萱刈道心重氏は
其の日は大師の花の役右に花籠左に珠數

●『三鈷五鈷』鈷とは天竺の兵器にて之を摧破の杵として佛具に用ふ銅にて作り兩端の尖りたるを獨鈷と云ひ又兩端の三叉なるは三鈷五叉なるは五鈷と云ふ弘法大師唐より歸朝の際彼地より投げられたるもの高野山に止まりて其地に松や杉を栽ゑたりと

●『無明の橋』無明とは過去の煩惱の惑ひにて現世の本性を蔽ひ貪に邪見の心を起し事理に闇きを云ふ此場合は橋の名にて御廟の橋とも云ふ

●『道心』十三歳若くは十五歳以上にて佛門に入りたる人の稱なり即ち出家したるもの佛果を求むる心菩提心を求むる心を云ふ

光明眞言唱へつゝ御山を下り給ふ時石童丸は登り坂互に親とも我子とも知らねば傍に立ち寄りて見上げ見下ろす顏と顏二人の袖のもつれ合ふ血筋の因緣是非もなや其時石童刈萱の衣の袖にとりすがり御尋ね申す御僧樣此の御山にて我父の今道心となられしを御存じあらば御情に何卒敎へ給はれと問へば刈萱いぶかりつ見れば幼き一人旅御身の尋ぬる父上は國は何處名は何と云はれて石童涙ぐみ

●『光明眞言』光明とは慈悲博愛の如き意味にて弘法大師を念ずる眞言なり

●『因緣』物事の成立の基を因と云ひ成立せしむる力を緣と云ふゆかりのことちなみの事なり

●『法』一定のおしへ即ち御山の御法は破られぬと云ふ意

國は筑前博多にて探題守護を司どる加藤左衛門重氏と名のれば刈萱驚きてさては我子か懷しやと持つたる花籠取り落し御山の法は破られず云はんとせしがまてしばし恩愛の涙せきあへず自ら心はげませど顏にかゝりてぬれければ露か雫か石童の幼心に怪しみてなげかせ給ふは何故ぞ若しや父上にては在さずや父上ならば片時も早く名乘りて下されと云はれて刈萱道心は落つる涙をふりはらひ我は父にはあらねども

●『海山越えて』筑前より紀州迄は海や山を越え來りて遠き故也

●『御慈悲』此場合はおなさけにと云ふ意

尋ねられたる其人は多き御弟子の其中に兄よ弟と睦みしに去年の秋の末つ方空しくなられし不憐さよ海山越えて遙々と尋ね來られし甲斐もなき其の心根を思ひやり覺えず涙を流せしと語るを聞きて石童は打驚きて倒れ伏しワツと計りに泣きしづみそは誠にて候か御僧樣定めて御墓も在すらん憫れ御慈悲に其の墓を教へ知らせて給はれと願へば刈萱是非もなく石童丸の手を取りて其頃立てし新らしき石碑の前に連れ行きて

●『麻衣』麻ぬのにて作りたる法衣僧侶の着る物　此場合は國に殘れる姉千代鶴が夜業の仕事に製りて托したるもの父に逢はゞ渡さんと思ひし麻衣なり

●『不憫』あはれむべきことといとほしきこと

是ぞそなたの父上のはかなくなりし標ぞと見るより石童伏しまろび嘯情なの此の有樣と涙の雨にくれけるが軈て取り出す麻衣是れは姉君が父上に逢ひたる時に進ぜよと心つくしの品なれば如何にか喜び給はんと携へ來しも仇にして逢ふ由もなき悲しさよ麓にまします母上が此由聞かせ給ひなば不憫のものと思召さぞや歎かせ給ひなん石童尋ね來たかよと他し御墓に取りすがりたツた一と言聞かせてと前後も知らず悲しめば

●『悲歎』かなしみなげく事

●『千萬無量』千も萬も數かぎりなき意なり

後ろに立ちし刈萱もこらへし胸のため涙
思はず ワッとせき上げて共に悲歎にくれにけり
斯ては果じと刈萱は石童丸に打むかひ
歎かせ給ふは理なれど涙は佛のためならず
早々麓に下りゆき母に孝行盡されよと
さとし給へば石童は涙ながらに立ち上り
かへり見〳〵泣々も杖にすがりて下り行く
幼な心を察しやり後より見送る刈萱の
心の内は千萬無量思ひやるだにあはれなり
思ひやるだにあはれなり

六代君 上

早川紫陽作

六代は平相國清盛の嫡子小松内府重盛の嫡子三位中將維盛の嫡子なるを以て實に平家の嫡々なり壽永二年七月平家の一門京都落去の際六代は母夜叉御前に伴はれ北嵯峨大覺寺（眞言宗）の奥菖蒲谷に潜み居しが文治元年三月平家は壇の浦に於て全滅し源氏一統の世となりたれば源頼朝は其の臣北條時政を以て京都の守護代とし併せて平家の子孫を搜査し之を殺害せしむ時政賞を懸けて探索し得て殺害すること數人なり偶々六代の所在を知るものあり同年十一月晦日六波羅に訴ふ時政内偵の末之を確かめ遂に六代を逮捕、夜叉御前を始め乳母及女房達迄無量の悲哀に暮れ殊更乳母は狂亂の如き狀態にて目途も無く馳せ出て田野を駈け廻りしが端無くも行脚の尼僧に邂逅し其態度を不審されて悉しく現狀を語りたれば尼僧曰く高雄山（神護寺と稱し眞言宗なり）の文覺上人は近來一人の稚兒を索めらるゝと聞く上人は鎌倉殿（頼朝）には殊に關係深き人なれば赦免の助力を請ふべしと勸められ乳母は尼僧に隨ひ高雄山に上り强て上人に縋りて頼めば上人は六波羅に至り時政に會ひ二十日間の猶豫を托し遂に頼朝に助命の承諾を得んため鎌倉に下向せしなり

●『枕の四旬』月も中天に盈れば次第に西へ昃く如く海の潮も満れば干る如く盛なる者は必ず衰ふるの理に洩れぬは人の常態であると言ふ意にて一時は盛大なりし平家も遂に衰へ滅びたるに形容せり

●『榮華』草木の榮ゆること人の富貴なるに喩ふ

●『鎌倉山の旗風』源頼朝は鎌倉に在り源氏の白旗の勢ひに六十餘州吹き靡けたるを云ふ

●『跟も無く』何どりも無く即ちかげもなくと云ふ意

●『草の家』田舍の小さき家と云ふ意

●『公達』此場合は摂家清華の子孫の敬稱なり。

月に盈昃の誡めあり潮に満干の習ひあり
盛者必衰の理りに洩れぬは人の常ぞかし
然しも榮華に飽果てし二十歳餘りの夢醒て
鎌倉山の旗風に六十餘州隈もなく
吹き靡けたる草の家に潜みし平家の公達は
幼稚きさへも容赦なく搦め捕りてぞ滅しける
茲に平家の嫡々にて三位中將維盛の
忘れがたみの六代君は母夜叉御前諸共に
京都盡れの片山家大覺寺にぞ忍ばれて
廣き浮世を狭めつゝ二歳三歳は夢なれや

●『嫡々』正統の傳はりたる世嗣ぎの事前文に記したれば略す

●『雲井の月』雲の居る處にて空を云ふ又禁中は漫りに出入の出來ぬ處故之に喩ふ平家の一門は宮中に仙籍を占たる者多く故に雲井の月を眺めたり

●『茅廬』いぶせき家にて賤が伏家と言ふに同じ

●『鎌倉殿』源頼朝を指す

●『嚴命』きびしき仰ヤ付け

●『參向』まゐると云ふに同じ平家の正嫡の六代故召捕・言はず迎ひにまゐりたりと時政が叮嚀に投露したり

●『氷のくさびか轍の鮒か』凍閉づるを氷のくさびと云ふ人の困窮に迫るを轍鮒の急と云ふ

雲井の月も山里の軒端に曇る蓬廬のやどり
最と形きなく暮されける裏美に眼暗みしか
京都六波羅に訴へければ時を移さず北條時政
手勢を以て取り圍み鎌倉殿の嚴命にて
六代君を迎ひの爲め參向のよし傳へける
御臺を始め女房達若もと思ひ煩ひしも
また今更に驚かれ氷のくさびか轍の鮒か
救ふ手段も盡果てゝ何とせんかた泣く斗り
斯くて有るべきにあらざれば御臺は念珠取り出し
喃六代よ捕はれては迚も幸無き御身故

之は莊子の古事なり 略す

●『念珠』珠數のこと後又御前は六代に黒木の珠數を渡す

●『幸無き』幸ひ無き事 即ち捉はるれば殺さるゝに極り居る故幸なきと云へり

●『稱名』南無阿彌陀佛の名號を唱ふる事を 稱名と云ふ

●『苦患』くるしみうれへ

●『未來』佛敎には過去現在未來を分たり未來とは來ぬ世 即ち來世を 指す

●『假の浮世に假の宿』佛敎には無常なる現世を假のうき世にて假の宿りと云へり

●『娑婆現世』のこと

●『一つ蓮の臺』一蓮托生と云ふ佛語なり

●『未開紅』開いざる花の 莟の

兎にも角にもなりなん時 稱名唱へて後の世の
苦患を助かり給へとて 渡せば受る子心に
今母上に別離るゝは 譬喩がたなき苦みなれど
未來とやらに在しますに 父上に逢ふ樂みあり
假の浮世に假の宿 娑婆の緣しは短とも
母上百年の其後は 一つ蓮の臺にて
此年月の憂き艱難 語るは今より增ならむ
煩らひ給ふ事かはと 歲は十二の未開紅
心ばえさへ凛々敷も 此世の暇乞ひ受けて
靜かに輿に召さるれば 遺に勇き北條も

ことなり冬季と言ひ少年の事故此く云ふ

●『憧れ』思ひこがれてなやむ事

●『彷徨』所を定めずあるく事 行き迷ふこゝろ

●『端無く』はからず。ゆくりなくと云ふこと

●『行脚』諸國を巡りあるく僧の事を云ふ

●『乳みて』羽含むの義養育する事

共に首途の一と時雨 晴間なく〳〵護送せり
跡には皆々今は早 忍ぶやうなき聲を立て
岩にせかるゝ谷川の 割ては末に逢瀨なき
涙は袖に雨霰 乳母は取分け身も世もあられず
跡を慕ふにあらねども 遂には野邊に走り出てゝ
天に憧れ地に伏しつ 其處此處となく彷徨ひけるが
端なく出逢ひし行脚の尼に 此の有樣をいぶかられ
事落ちもなく語りしかば 尼も共音の曬ひ泣き
衣の袖を絞りつゝ 先つ頃迄吾も亦
某公達を乳みて 人目忍びし甲斐もなく

●『生滅々已に出る日も寂滅爲樂に入るとかや』生滅に生れて寂滅す故に寂滅する時に未來は生滅の法に應じて樂となすべしとの事なり要するに生滅々已を陽とし畫と見て寂滅爲樂を陰とし夜と見れば大差なし隨分理由深きものなるも之に止む

●『經じ』物事を分別し見解する事

●『菩提』佛門に入りて念佛する事

●『墨染』黑色の淨衣僧の着る衣

●『投苦興樂の法の道』苦を投げて樂を興ふ般若波羅密多心經を師持講供すれば苦が去り樂が來ると云ふこと

●『高雄』高雄山にて紅葉の名所なり神護寺と云ふ眞言宗の寺あり文覺之に住す

●『稚兒』此場合は寺院の小姓なり小間使即ち給仕なり

●『慈悲の眼』なさけ、おはれみいつくしみの眼

●『東路』『東國の路』關東方面を云ふ

●『齎す』『持て來る』即ち吉左右を持て來ると云ふ事

情け知らずの坂東武者に其公達を殺害られ御身と同じ思ひにて夢現とも分かざりしが生滅々已に出る日も寂滅爲樂に入るとかや老少不定は露塵の浮世の習ひと觀じつゝ切めては菩提を弔らはんと我から憂を捨て衣垢には染まぬ墨染の拔苦興樂の法の道踏分〳〵歩行ぞかし然はさりながら六代君はまだ事もなく御座すべし此山奥の高雄には鎌倉殿の因も深かき文覺上人ましますなり近頃御寺に稚兒一人索め給ふと仄かに聞くいざさせ給へ共々に聖僧の力頼まんと勵ます詞に勵まされ乳母も縋りし法の綱強て願へば上人も辿り辿りて分け登り慈悲の眼を濕ほされ我は昔の恩誼を笠に法の誓ひを杖づきて道も遙けき東路の鎌倉殿へ命を請ひ屹度吉左右齎すべしと事も促れば歳さへも迫る寒さの厭ひなく御寺を出でゝ上人は鎌倉指してぞ下られける

六代君　下

京都六波羅に捕らへられたる六代の助命を請ふため文覺上人は北條時政に二十日間の猶豫を托して鎌倉に下りし後は既に約束の期限は切れたれども音沙汰無く然りとて時政も六代を殺害するに忍びず仍て自身も鎌倉へ下向する故六代を輿に乘せ同行して東海道を下る其意は文覺上人の上るに行逢はん爲なり六代の臣齋藤五齋藤六の兄弟は跣足の儘徒歩して輿に從ふ漸く駿河國千本松原に至る之よりは箱根越と足柄越との岐るる路なり殊に此山を越ゆれば相模國なれば鎌倉殿の聞えも憚りあり止む無く此地に於て六代を失はんとす太刀取即ち斬人を命ずれども何れも逡巡躊躇して時間を費す折柄墨染の法衣を着し大音上げて馬を馳せ來る僧あり文覺の弟子覺文にて頼朝の赦免狀を携帶せり須臾にして文覺上人も馳せ着く曰く六代は平家の正嫡とて御赦免無く種々懇願し弟子の僧となす條件を以て僅に赦されたりと時政も之を聞て喜び六代を文覺に渡す仍て勇み進んで京都に歸りしに母も乳母も以前の僑居に在らず大和國長谷寺の觀世音に寄籠の由を聞き齋藤五之に詣りて迎へ來る直に六代は文覺の弟子となり高雄山神護寺にて出家す後ち事に慮して自殺すと云ふ

文覺上人は院の北面の武士武者所遠藤盛遠の後身なり十八才の時源渡の妻袈裟に懸想し誤つて殺害し頓悟して桑門に入り後故ありて伊豆國に流さる序で頼朝と知り爲に大に寵す高雄山神護寺に在り文覺の事

蹟は他日更に記する所あるべし

附言六代の歌曲は上下二段となし十數年前の拙著なりしが其上段丈を送り居たるため下段は他の著となれり各自意見の異なる處ありて連絡に乏し他日本書の後篇に拙著の下段を發表する事となすべし

●『洛西』京都を洛中と云ふ支那の洛陽に出たり洛西とは洛外即ち京都の西の方なり

●『有無を言はさず』鬼や角言はせず即ち他を押し付て事をなすをいふ

●『猶豫』ためらふて時日を延ばす事

扨も平家方の隱れ人三位中將維盛卿の御嫡子年十一歳の六代君は洛西大覺寺の山奥に母君と隱び給ひしを京都の守護北條時政鎌倉殿の命により有無を言さず引捕へ既に失ふべかりしを母君の歎きにより高尾の文覺上人より命乞ひありしかば情に二十日の猶豫をなし文覺が鎌倉よりの免し文

●『霜月』陰暦十一月の異名。
●『恋』此場合は高徳の僧の尊稱と見て可なり
●『東海道』京都より鎌倉に下る道にて山城、近江、美濃、尾張、三河、遠江、駿河、を經て相模に入るなり
●『具し奉り』伴なひ連れて行く事。
●『四の宮、關の山、大津、打出の濱、粟津ヶ原』何れも近江の國の地名にして掛け詞なり即ち心が急くを關の山とかけたる如し
●『近江、美濃、尾張、遠江、駿河』何れも沿道の國の名にして矢張り掛け詞なり即ち我身をどうするかと駿河とかけたる如し

取歸らむをぞ待ちにける時は霜月末つ方
木々の紅葉の散り〳〵にたよる隈なき寒空の
僅か二十日の殘り葉はいかなる風か冬の夜の
吹かば晨の命かな待てど暮せど音もなく
最早猶豫は成がたし文覺の聖に逢なむまで
東海道を下らむと北條は六代君を具しまつり
都をこそは立にけれ今日を限りの命かや
四の宮川も忌はしく思へば心の關の山
大津の浦や打出の濱文覺坊にも粟津原
近江の國とは名のみにて美濃尾張かとかこちつゝ

●『無垢の眞砂』けがれぬ淸き砂のこと眞砂は細かき砂を云ふ
●『宿々驛路』街道筋數里毎に有りて旅客を宿し又は荷物運送のつぎ立てをなす設備の有りたる所なり
●『一徹』一ト筋に思ひ込みたる事は容易に思ひ直す事の出來ぬ人。
●『所詮』つまる所又は畢竟なり
●『山のあなた』箱根、足柄の山のあなたは相模國なり鎌倉に近き故に山のあなたには越え難しと駿河國より指して言ふ詞
●『暗涙』なみだぐむ事

戀しき都は遠江我身をいかに駿河の國
千本松原と成りければ御輿はハタと止りけり
北條時政馬より降り無垢の眞砂に敷皮敷かせ
六代君を座に直し御側近く平伏しつ
文覺上人に逢なむと宿々驛路見張候も
今に見えさせ候はぬは御免されや難からむ
鎌倉殿は一徹の君なれば所詮御あきらめさせ給へ
山のあなたは越えがたく此處にて失ひ參らすれば
御覺悟候へとぞ申ける六代君は言葉なく
御供に侍る齋藤五を召せられ暗涙に咽び宣ふは

●『西に向ひて手を合せ』西方に淨土ありと云ふ佛說より無量壽佛の來迎を待つ意にて末期の際西に向ひ手を合する習慣となれり

我は茲にて斬らるべし汝は是より都へ歸り
母上には鎌倉へ無事送りしと申せかし
我れ斬られしと聞し召さばさこそ歎かせ給ふらめ
齋藤五は涙を打拂ひ下僕は君死し給へば御後を追ひ
死する身にし候へば都へ歸り候義は
御許しあれかしとまろび伏てぞ歎きける
六代今は疾く〳〵と肩にかゝりし黑髮を
雪のかひなに搔きあげつ前の方へぞ垂れ給ひ
西に向ひて手を合せ大慈大悲の法の加護
冥土に在ます父上に逢させ給へ阿彌陀佛と

●『大慈大悲の法の加護』大慈は人に樂を與ふる大なる功德大悲は人の苦を救ふ大なる功德なり其大慈大悲の御法の御まもりと云ふ意

●『冥土』よみぢのこと先の世を指す

●『稱名念佛』稱名は佛の名號を唱ふる事念佛は專念に南無阿彌陀佛と唱ふる事

●『太刀引きそばめ』太刀を目に懸らぬ樣に横に提げて居る貌

●『妙の御姿』勝れて奇麗なる御姿

●『前後不覺』あとさき覺へぬ樣にと云ふこと

●『黑衣』黑色の衣は墨染にて主に僧侶の着る衣

●『ひらり』輕く飛ぶさまを云ふ

稱名念佛目を閉ぢつ首さし延べてぞ待ち給ふ
狩野工藤三郎親俊斬手の役に撰ばれければ
太刀引そばめ後に廻り妙の御姿拜し奉り
目もくれ心消え果てゝ前後不覺と成りければ
餘人に仰せ候らへと太刀打捨てぞ退にける
さらば誰れ斬れ我れ斬れと讓り合つゝ居たりし折柄
遙かあなたの渚傳ひ黑衣の袖を褄に結び
右手に笠もて打招き聲を限りの旅の僧
馬躍らせて驅せ來る近づくまゝに見てあれば
待ちに待ちたる文覺なり文覺馬よりひらりと降り

●『承引なく』うけ引かぬ承知せぬ事

●『那須野の狩』那須野は下野國に在り狩は鳥獸類を追ひ捕ゆるを云ふ但頼朝の那須野に狩せしは此時なるや否判じ難し

●『披見』狀を披き見・事

●『百舌鳥』燕雀類中百舌鳥科に屬する小鳥なり常に蟲を取りて食とす其聲高く喧ずし

●『百舌鳥に捕られし小雀』が鷲の來たるため百舌鳥に放されて逃げ助かりたるを言へり

●『白羽鳥』は白い鳥と云ふに過ぎず後の命はどうなるかしらずといふかけ句に用ひ舞ふて歸るを呼び起すためなり

●『舞ふて歸る』六代が芽出度助かりて歸るを云へるなり

アナ待佗び給ひつらむ　六代君は大將の子なれば
外の子よりも免されじと　中々に承引なく
那須野の狩に出でられしを　文覺狩場に追ひ縋り
樣々と申し受けて候　イザ御覽候へと差出す
北條受取り披見するに　疑もなき免し文なりければ
皆愁の眉をぞ開きける　百舌鳥に採られし小雀の
命の際を追ひ鷲に　拾ふ命ぞ嬉しけれ
後の命は白羽鳥　一度晴るゝ大空に
舞うて歸るぞ目出度けれ　舞うて歸るぞ目出度けれ

鉢の木

葉石洞陽氏作

北條時頼は修理亮時氏の子母は秋田城介景盛の女にて有名なる松下禪尼なり時頼少年にして鎌倉の執權職を嗣ぎ建長八年十一月最明寺に於て落飾し弘長三年十一月に卒す三十七才なり時頼の在職中は頗る意を用ゐて治蹟大に揚がる後ち嫡子時宗に職を讓り二階堂入道を隨へて行脚僧となり密かに鎌倉を出でゝ諸國を遍歷すること三年なり而して佐野源左衞門常世の事は史蹟の徵すべき所なし諸曲に上野國佐野に浪居せる時最明寺（覺了坊道崇）入道が大雪の日に一夜の宿りを借りたりし事を假作して鉢の木と稱せり本歌曲は勿論謠曲を改作したるものなれば今之に依て解釋す上野國に常世の墓碑在りと稱するも之を以て事實とするに足らず

●『敷妙』夜寢る時に敷く衣を云ふ要するに枕詞なり此塲は一面敷きたる雪の枕詞なり

●『佐野邊』上野國高崎より二十丁東に在り

●『雪似鷺毛飛散亂人着鵜蓑立徘徊』白

駒をとゞめて敷妙の　袖打ち拂ふ蔭もなし
佐野の邊りの雪の暮　佐野の邊りの雪のくれ
雪似鵜毛飛散亂　人着鵜蓑立徘徊

氏文集の詩なり。詩の大意は雪降り頻りて雲鳥の白毛の如きものが飛び散り亂るゝに似たり人は鶴の羽にて作りたる美しき防寒衣を着て行きつ戻りつすると云ふ意なり

●『一處不住の雲水』一つ所に住まず行雲流水の去就は心の儘なる行脚僧を雲水と云ふ

●『善根の種』佛書に現世にて行ふ業に因りて未來の佛果を求むるの理を示す之より出たり

●『賤が伏家』賤はいやしき伏家は地に伏したる如き小さき家即ち田舍の小さき家なり

●『佗住居』さびしき住居にて心浮き立たずしていたましき住居なり

●『夕餉』夕食のこと

それに見えさせ玉ふは
この家の主人に候はずや
われは一處不住の
雲水の身にて候が
この雪暮に道迷ひ
いとゞ困じて候程に
あはれ一夜のやどりをば
めぐみ玉へと云ひければ
主人はいとゞ恥らひて
御宿申さば善根の
種ならむとは思へども
賤が伏家のわび住居
召し給ふべき夕餉とて
夜の褥も持たぬ身は
御宿の事は難からん
さはいへ忍んで給はらば
見苦しけれど一夜をば
明かし玉へと申しけり
旅僧は喜び内に入り
草鞋解き捨て座に直り

●『夜の褥』寒さを防ぐため夜の物即ち夜具などを云ふ

●『あはき浮世』より以下三句は人情の淡き世並に外れて夫丈が心の厚き狀態は殊勝なりと云ふ意なり殊勝は最も勝れたること

●『邯鄲』『楚國羊飛山の驚』に在り

●『盧生が夢』盧生と云ふ青年邯鄲の亭舍にて仙術を得たる呂翁と云ふ者の枕を借りて午睡せり其枕は青磁にて兩端に竅あり盧生其竅を見れば頗る明かなるを以て之に入り夫より萬事意の如く行はれ五十年間の富貴榮達を盡して夢醒め茫然として起き上り見れば亭舍の主が蒸したりし黍は未だ熟

夕餉も淡き粟の飯
あはき浮世に暮せ共
夫婦の心厚くして
饗應樣ぞ殊勝なる
實にや浮世は彼の邯鄲
芦生が夢とつき果てゝ
今は佗しき此の住居
松吹く風や野邊の霜
降りにし夜半は夜もすがら
寢られねば夢も見ず
何おもひ出のあるべきと
はなす話の長ければ
小笹が上に積む雪の
落つる音をもいと冴えて
夜もしみ〴〵と更け渡り
焚きて寒さを凌ぐべき
薪もつきて消え〳〵の
この家のうちの哀れさは
譬へんものもなかりけり
何思ひけん主人には

せざりし依て盧生か一睡の夢と云ふ之より盧生は功名利達の心も失せ悟りを開きたりと云ふ小說なり

偶意は人間一生の盛衰は一場の夢に過ぎざるに喩ふ

●『夜もすがら』終夜のこと夜とほしたり

●『小笹が上に積る雪の落つる音もいと冴えて』大雪の時竹木の葉にも積れり然れども植物の温氣にて下より解けて辷り落ち音斷し之をしづり雪と云ふ

●『常盤』永久に變らぬ常盤と云ふ何時迄も其狀態を保つ事なり松は四時緑色を變ぜぬ常盤木なり

●『領地』領上即ち知行する處

●『横領』掠奪せらるゝこと勝手に取らるゝことなり

●具足　具はり足ると云ふ意にて始めは什器の稱なりしが轉じて甲冑の稱となれり

●『薬破』突然の出來事に驚き發する聲を云ふ此場合は鶯綾鎌倉に事ありと云ふ意

●『のこる雪』殘る雪は春山に解け殘りたる雪を云ふ此場合如何哉

●『銀花繚亂朔風寒遠近模糊看不看』銀花の雪がちらばりみだれて北風が寒く遠き處も近き處もハッキリと見えぬと云ふ降雪の景なり

庭の方へとたち出しが携へ來たる鉢の木は梅松櫻の三種にて梅は艱苦に堪ふるなる花咲く春もありなんか松は常盤の深みどり誓ふこゝろのためしをば零落れたれどかはらじと花は櫻に人は武士こゝろのまこと切りて焚く旅僧深く感に堪へ如何に主人よ御苗字を名のり玉へとありければ主人は形容を改めて某こそは佐野の源左衞門常世がなれの果にて候が一族どもに領地をば横領せられこゝに浮世の假り住居とは云ふものゝ今こゝに

痛せたりとも馬一匹ちぎれたれども具足一領素破鎌倉と聞くならば先づ一番に馳せ參じ討死なさん身の覺悟思ふ敵と引組んで先づそれ迄はわが生命たとへ飢ゑても死ぬまじと こゝろに誓ひ侍るぞと話もつきず明けの鐘共に名殘ものこる雪踏みて別れを旅の僧

銀花繚亂朔風寒　遠近模糊看不看

何處を的にかへるらむ斯くて月日もたつうちに鎌倉よりの命なりと鎧冑に身を固め集りつどふ大小名中に常世は只一人

●『執權』將軍を輔けて政治を行ふを云ふ

●『本領』もとの知行所

●『梅田松ケ枝櫻井』何れも地名にて加賀に梅田上野に松井田越中に櫻井あり

●『御敎書』將軍より下さるゝ文書を敎書と云ふ

●『優曇華』優曇は靈瑞又は瑞應の梵語にて想像上の植物

やせたる馬に繩手綱　衆にかはりし粧にて
鎌倉指して馳せて行く　こゝに時の執權時賴入道
常世を御前に召されつゝ　余はすぎにし雪の暮
汝が家に宿りをば　求めし旅の僧なるぞ
其時汝が誓ひたる　言葉に違はぬ武士の道
いかで報はで叶ふべきと　即座に常世が本領たる
佐野の庄のその外に　梅松櫻に因みある
梅田松ケ枝櫻井の　庄をも合せて三十餘郷
子々孫々に賜ふにぞ　常世は御敎書押戴き
再び花咲く優曇華や　繩の手綱に引かへて

なり曰く芽出でゝ一千年蒼を含みて一千年花開きて一千年都合三千年に一回華を開くと云へり要するに世に稀なることに比喩ふ

●『足駄』駒の足並を云ふ

故郷に飾る綾にしき　駒の足搔を早めつゝ
本領さしてぞかへりける　武士のさまこそ芽出度けれ

芳流閣

南總里見八犬傳は江戸時代の文豪曲亭馬琴が二十有八年の心血を傾注したる傑作にて水滸傳に於ける百八の勇士に擬らへ八顆の靈玉を以て八犬士を生じ大に活躍せしめたる一大雄篇なり素より空中に樓閣を設けたる小説にて本歌曲芳流閣の如きも其一節なり八犬士中の犬塚信乃は主家に傳來せる寶刀村雨を故主成氏に納めんとして其刀の既に取縋へられたるを知らず古河に行きて其擬物なるを覺りたるも及ばず却て敵國の間諜なりとの疑ひを受け將に生擒せられんとするに至りたれば之を逃れて城内の三層樓芳流閣に上る何れも捕へ得る者無し依て當時幽囚中の犬飼現八を赦して逮捕に向はせたり之亦八犬士中の一人にて兩人が龍攘虎搏大に奮闘したるの狀態を作歌したるものなり

嗚呼憐むべし犬塚信乃は　親の遺言記念の名刀
心に占めつ身に傳けつ　艱苦の中に年を經て
得がたき時を得てしかば　はる〴〵滸我へ齎して

名を揚げ家を興すべきその幸は禍ひと
ふりかはりたる村雨の刀は舊の物ならで
今や我身を劈かむ讐となりしぞ憾なる
されば當座の辱めを避けなむものと犬塚信乃
夥多の圍を切開き芳流閣の頂上に
輙く攀ぢつ登れども脱れ去るべき途もなく
如何はせんとためらひつしばし息をば休めたり
時しも頃は六月二十日昨日も今日も乾蒸の
燄熱をわたる敷瓦凸凹隙なく波濤に似て
下には大河滔々とこゝ生死の海に入る

●『巾上』最も上にて此場合は芳流閣の棟の上なり

●『ためらひつ』如何せんと迷ふてぐず〳〵する貌

●『燄熱』瓦の炎熱に燒けたる火照なり

●『滔々』水の盛んに流るゝ貌

●『生死の海』生くるか死するかの境と云ふ意佛語より出たり

●『坂東太郎』坂東八ヶ國第一の大河故此名あり利根川の別名

●『身を図ませて』六月に霞ば無けれ共高楼の事故下より見上れば小さく霞み行く如しとの意

●『鼯鼠』栗鼠科の動物にて稍大なり前後の兩脚間に膜ありて其く樹上を飛行す深山に住し鼠は小兒の泣くが如し

●『十手』捕吏が用ゐて罪人を捕ふるもの鐵の短き棒にて小程に鉤あり

●『浮圖の上なる鶴の巣を』浮圖は佛陀なり覺と譯す或は卒堵婆を稱す又寺塔を云ふ鶴は鵜の一種にて水鳥なりこうのとり

溯洄は名に負ふ坂東太郎　水際の小船楫絶えて
進退こゝに谷まれり　折しも俄の捕手承る
犬飼現八唯一人　身を霞ませて登りゆく
一層二層三層と　梢を傳ふ鼯鼠の
狂が如く攀ぢ來り　御諚ざうと呼掛て
拿たる十手閃めかし　矢庭に信乃に寄り近づき
組まんとすれど寄附ず　迭に隙を窺ひつゝ
疾視あうて立たる形勢　浮圖の上なる鶴の巣を
巨蛇のねらふにさも似たり　廣庭に控へたる
成氏公を始とし　警固の武士共堅唾をのみ

又はこうづると云ふ

●『警固の武士』非常を警めて防ぎ備ふる武士

●『一上一下虚々實々』兩勇士が闘ふ狀態を形容したるもの也虚はうそ實はまこと上段下段に誘ひの虚を示し實を顯はし戰ふさま

●『錚然』金の爭ふ聲音響なり音を立てゝ風の起るさま

●『青潭』水の青く深くたゝえたる所即ち淵なり

●『沛然』雨の甚しく降り出すさま

●『壘かけて』つゞけさまにと云ふ如し

手に汗握り見詰めしが　如何なる隙かありつらん
信乃が切込む太刀風に　發石と受留む十手の電
辷る甍を踏み駐めて　一上一下虚々實々
寄せては返す太刀音被聲　兩虎深山に挑む時
錚然として風起り　二龍青潭に戰ふ時
沛然として雲起るも　斯やとばかり恠しまる
天に聳る高閣の　棟に爭ふ未曾有の晴業
足場を揣り撓まず去らず　疊かけて擊太刀を
現八右手に受流し　返す拳に附け入りつ
ヤッと被けたる聲諸共　眉間を望んでハタと打つ

●『覆車の俵』坂上にて覆りたる車より俵が落ち来る如く兩人がくるくる廻りて落ちる體なり

十手を丁と受留むる信乃が双は鍔際より
あはれポッキと折たれば現八得たりと無手と組む
互に利腕確と拿り捻ぢ倒さんと聲合せ
揉みつ揉るゝ力足此彼齊しく踏み辷らし
河邊の方へ覆車の俵坂より落るに異らず
高低險しき藁の勢止まるべくもあらざれば
幾十尋なる屋の上より末遙なる河水の
底には入らで程もよし水際に繋げる小舟の中へ
累り合ひつ落ちたりける傾く舷と立つ浪に
ザンブと音す水煙纜丁と張り斷りて

●『誘ふ水』下に流るゝ水にさそはれ追手の風や引き汐にさそはれ舟は行衛知れずになりたり

射る矢の如き早川の眞直中へ押出され
しかも追風と虛潮に誘ふ水なる洄り舟
往方もしらずなりにけり往方もしらずなりにけり

羽衣

三保の松原は駿河國有度郡に在り此處に三穗神社羽衣社あり昔時天女飛び來りて其羽衣を松ケ枝に掛け居たるを漁人白龍之を拾ひ取りたれば天女は羽衣を失ふて飛ぶこと能はず切りに返さん事を求む遂に相約して羽衣を返へす天女喜んで飛び去らんとして約したる霓裳羽衣の曲を舞ふて殘したりと云ふ漁夫の名を白龍となせしは白龍魚服して漁人豫且に困めらると言へる故事より出たるか素より年代等の證すべきもの無きは寧ろ當然にて本歌曲も謠曲を改作したるものなり

長閑き御代の春霞　青海原は波もなし
富士を向ひに三保が崎　松の翠の水や空
心も澄める朝風の　山路を分けて清見潟
見渡す方は遠近に　釣船多く浮ぶなり

●『長閑き』空晴れて天氣の靄かなる事日和の穏かなる事御代の靜かなるに形容す
●『清見潟』駿河國海岸に在る名所なり

折しも虚空に花降て　妙なる樂の音と共に
靈香四方に薫しける　是は此浦に住める
白龍と申漁夫にて候　アラ不思議やな
之只事に非ずとて　松の梢を見上ぐれば
世にも美しき衣懸れり　白龍之を見るよりも
イデ〳〵取りて歸らばやと　竿取りのべて引下ろし
我思はずも　斯る美しき衣の手に入りし嬉しさよ
末代までも　家の寶となさばや
アラありがたしと打笑みて　立ち去らんとせし折こそあれ
松の木蔭に聲ありて　喃其衣は

虚空『天地間の空なる所』佛書には無相無色なりと言へり大空のこと
●『妙なる』極めて巧なる事勝れてよきこと
●『靈香』此場合焚き香ひたり
●『梢』木の枝の末なり

●『羽衣』鳥の羽にて作りたる衣にて天女の着るものなりと云ふ

●『衣通り』雪の膚が衣の上より見え透くと云ふ形容なり

●『かざし』昔は冠又は頭の上に花枝等を翳したりし今の櫛なり

●『天女』女神又は女性の天人

●『むざとは』返す事惜し氣も無く即ち譯も無く返しはせぬと云ふ意

●『天津御空』大空のこと

●『下界』天上に對して此世界の事を云ふ

天人の羽衣とてたやすく人に與ふべき物ならず元の所に置き給へと言ひつゝやがて立出づる天津乙女の艶姿花の顏せ月の眉雪の膚の衣通りてみどりの髪の匂やかにかざしの玉の粧は何にたとへん方そなき白龍は打驚き扨は天女にましますかやさりながら一たん拾ひし此衣をむざとは返す事叶ふまじと言ふに悲しく天人は羽なき鳥とはなりはてゝアラ情なや衣なくては此まゝに天津御空に歸られず去りとて下界に止まり難し

●『月の桂』桂とは木屑の事なり西陽雜俎に曰ふ月中に桂あ高五百丈あり吳剛と云ふ者仙を學び過ちありて罰せられ其樹を伐らしめらる伐るに隨ひ合して遂に能はずと云ふ但し月の桂は其光りを云ふものと見て可なり

●『蝶の羽衣』蝶の羽の樓なる薄き奇麗なる衣を云ふ蝶はよく舞ふもの故之にかけたるか

這は何とせんと計りになげきに沈む有樣は雨を含める櫻花雲に光りを消されたる月の桂もかくやらん白龍哀れと思ひければ其御歎きのいとしさに衣をば返し申さうづる程に天人の舞曲を奏給はれと抱へし衣を差出せば天女は喜び伏し拜み衣を返し給らばイザ〳〵舞ふて見せ參らせんと蝶の羽衣着なしつゝ空とぶ鳥とならんとせしを白龍暫しと引止め衣をつけし上からは其儘天に昇らんも計りがたしと疑の言葉を天女は打消して

●『天には僞り無きものを』忠經に曰く天に私無し四時行とあり抑疑ひは人間界の事にて天上には總て僞りは惡しと云へり

●『霓裳羽衣の曲』一越調にて天女の舞樂なりと云ふ唐の玄宗皇帝は開元六年仲秋望月月宮殿にて之を得たりとも云ふ

●『月宮殿』月の中に在りと云ふ宮殿を指す

イヤトヨ僞りは下界にこそあれ
天には僞りなきものを
是れ見給へと袖打はらへば
早春風にひら〳〵と昇るや雲雀の如くにて
忽ち姿は虚空にあり其時乙女は莞爾かに
佇む漁夫を見下ろして霓裳羽衣の曲を奏で
心ゆたかに廻りける月宮殿に在りと言ふ
御遊の折の舞の振よく〳〵三保の浦人よ
深き情に應へんと巡り〳〵て松原に
鶴の羽衣舞ひ遊ぶ空は一つに春の海
沖の白帆か鷗かと見送る姿いつしかに

●『天津乙女』天人即ち天女の事

●『久方』日遠方と云ふ義天に關する事に引用する冠詞

雲の浪立つ富士の山頂き遠くなる迄に
天津乙女は久方の雲井はるかに昇りつゝ
月の都に入りにけり月のみやこに入りにけり

哈爾賓の露

伊藤博文公の傳記は洽く人口に膾炙せる所なれば多くを贅せず公の晩年に朝鮮統監となりて遂に日韓併合の大事業を遂行し後ち日露協約の爲め大磯滄浪閣の別邸を發し下の關市より鐵嶺丸に搭じて大連港に着き夫より哈爾賓府に赴きたるに魯國の文武諸官出で迎へ頗る叮嚀を盡せり當時哈爾賓は魯國の勢力範圍なりし公の列車を降りる事數歩にして朝鮮平安道の安重根なる者短銃を以て狙撃し遂に公を不歸の客とせり要は日韓併合を恨みたる誤解より出たり時は明治四十二年十月二十六日なり

●枕四句の主旨『人は公明正大に行ふて行けば天にも愧ぢず地にも怍づることなし只一意丹心國家の爲に盡し遂に國家のため生命迄も殞したる英雄の名譽は萬代に輝くと云ふ意

●『國に殉ぜし』國家の爲に生命を殞したるを云ふ

●『英雄』才智能力等の抜群に勝れたる人を云ふ

●『維新』萬事革まり新らしくなる事 明治初年の改革を指す

●『文明』人智進歩し百事整備し野蠻的時代と遠ざかるを云ふ

●上御一人『天皇の御事

●『名聲』世間のほまれや評判の好き事

●『驕ふし』一世に他に並ぶ人の無き意

●偉人 偉大なるすぐれたる人

●滄浪閣『伊藤公の住はれたる大磯の家

●『小波』さゞれ波にて細かく立つ波

●白帆 閑鷗を伴とし『沖行く白帆や閑かに海上に遊ぶ鷗などをながめて

●『悠々自適』心ゆるやかに

仰ひては上天に愧ぢず　俯して大地に怍ぢずして
國に殉ぜし英雄の　名は萬世に輝きぬ
茲に從一位大勳位　公爵伊藤博文は
維新の頃より大君の　御代を輔佐て四十年
内には文明の基礎を固め　外には平和の策を樹て

上御一人の御覺へ深く　下萬民の望みを荷ひ
其名聲は一世を曠ふし　實にも偉人と稱へたり
滄浪閣上風清き　松原見越す小波や
白帆閑鷗を伴として　悠々自適の樂しみに
耽り得つべき老の身も　國に許せし丹心は
席温まる餘暇もなく　先には奥羽北の海と
韓の世子の道しるべ　又這回は遙げくも
虎の臥すてふ滿州に　東洋平和の大計を
定めん爲の旅とかや　松風渡る大磯の
身に泌む秋を後に見て　朝野の名士に送られつ

打くつろぎて氣慨にすること
●『席温まる餘裕も無く』じつと座って居る暇も無い事伊藤公が國家の爲に活動せるさまを云ふ
●『虎の臥すてふ』物凄く恐ろしい處を虎臥す野邊と云ふ
●『東洋平和』亞細亞の東方を東洋と云ふ平らかに波風立たず治まるを平和と云ふ
●『朝野』朝廷に在る官人と民間に在る人との義
●『芙蓉』此場合は富士山を指す
●『すだく』蟲の多く集り喧しく鳴くを云ふ
●『詩の大意』秋の晩に家を辭して遠方に行くの道に上る汽車の中で談話が盡きて虫の鳴く聲を聞く明朝行く處は支那北方

汽笛一聲ゆふ霧を破りて越ゆる箱根山
芙蓉の肌は粧ひて靜けき御代を誇るなり
裾野にすだく千草の虫も惠みの露に霑ひぬ

秋晩辭家上遠程
車窓談盡聽虫聲
明朝渤海波千尺
欲弔忠魂是此行

軌る轍は淀みなく船路に移る下の關
鐵嶺丸に身をのせて八重の潮路の波枕
軈て大連港に着きければ老體いとも健やかに
或は歡迎の席上に東洋平和の大義を說き
又は旅順の丘の上に勇將猛士の靈魂を弔ひ

渤海灣く波く高いであらう日清日露の戰役で戰死した勇將猛士の忠義の靈魂を弔ふも此行の目的の一つである
●『轍』車の輪の痕
●『大連港』滿州の遼東半島に在る良港
●『歡迎』好意を以て迎ふる即ちよろこんで迎へる席上
●『大義』最も重き國家に對する臣民の義務
●『靈魂』亡き人のたましひ
●『胡沙』砂ぼうすの土砂又は支那北方の砂
●『哈爾賓』北滿州松花江に沿ひたる交通の要地長春より北上し來れる東清鐵道の支線が本線と合する所露國が北滿經營の中心地なりし

更に胡沙吹く北の方
哈爾賓府にぞ進まるゝ
時しも明治四十二年
十月二十六日の旦
朔風凍る停車場には
露西亞に其名も著き
大藏大臣を始めとし
文武の諸官打連れつ
綺羅の禮裝華やかに
露清の兵士列を布き
王者を待つの禮遇も
斯くやと見ゆる此方には
吾が在留の同胞が
名聲四方に隱れなき
母國の偉人を迎へんと
襟を正して控へける
大藏大臣は公爵を
列車の中に起ち迎へ
徐かに列車を降らるゝ
喇叭起る軍樂の

●『朔風』北風を云ふ
●『大蔵大臣』當時の露西亞國の名士にてゴヽフツチ卿なり
●『綺羅の禮裝』綺羅は美はしき服を飾る事 禮裝は禮式の服を裝ふこと
●『禮遇』禮儀厚き待遇 特別の待遇なり
●『在留の同胞』外國に留まり在るを在留と云ふ 同胞は四海兄弟と云ふの意より自國人同士を互に同胞と云ふ
●『母國』其本國を指す
●『喇嗩』樂器の音のよく冴えて聞ゆる事を云ふ
●『咄嗟』ちよつとの間の事
●『神色自若』神色は顔色なり自若は態度の常と少しも變らぬ事

聲澄み渡る其の中を悠々一歩又一歩
次の一歩に移る時咄嗟に響く銃の音
スハヤ大事と人々が遮る餘裕もあらばこそ
哀れ老公の胸元を深く射込みし彈丸に
公爵屹と歩を止め撃たれたるぞと神色自若
騒ぎもやらぬ狀態は眞に皇國の礎なる
偉人とこそは覺へけれ吁矣天なる哉命なる哉
遺の公も急所の深手に列車を假の臥床とし
手を盡したる介抱も醫師の力も及びかね
はや臨終とおぼされけん盃取りて滿を引き

●『禮』物事の主腦又はもとゝなること
●『臨終』命の終るいまわの事
●『滿を引き』なみ〳〵と一杯につぐ事
●『詩宗』數多の詩人から仰がれる詩作の大家を云ふ
●『兇漢』わるもの、しれもの 他人の身體に危害を加へたるわるもの
●『兇暴』惡むべき亂暴

●『君寵』君の御恵に入り又君の御寵みを云ふ
●『恩賜』君より賜はりたる品物
●『英魂』すぐれたるたましひ

雫も止めず飲乾され撃れしは开も誰々ぞと
聲も慥に問はるれば川上領事森詩宗
田中の三人うたれしも何れも淺手に候へば
御心安く思せかし彼の兇漢は其場にて
直ちに捕へられつるに朝鮮平安道の者とかや
德に酬ゆる兇暴の毒手の彈丸に候と
答に公爵首肯きつ愚かの者よと一と言を
名殘りて消ゆる玉の緒に君寵少しも放さゞる
恩賜の杖を握りしめ六十九年君國に
盡せし英魂長しへに歸らぬ旅に赴きて

夢となりしぞ形なや　尊靈今に在すか
皇國の同胞擴がりつ　進み行く世ぞ尊けれ

錦の御旗

元弘元年八月鎌倉の執權北條高時は　忝くも後醍醐天皇及大塔宮護良親王を海島に遷し奉らんとす宮は敏くも察し給ひ大和國添上郡奈良坂の南に在る般若寺（眞言律宗）に於て危難を避け給ひ後ち赤松則祐村上義光片岡八郎矢田彦七平賀三郎木寺相模と僧玄尊勝憲豪雲の六士三僧を隨へて田舍山伏の熊野參詣の態にて姿も一つ心も一つに南都を忍び出で給ふ一旦同國十津川郷竹原八郎入道の許に潛み給ひしが熊野三山の別當定遍は無二の北條方なれば諸所に高札を建て賞を懸けて宮を圖らしむ爲に此地にも忍び難く再び從者と共に高野山の方へと赴き給ふ途次芋瀬庄司多勢を以て遮りて曰く宮に弓を引き參らせんは恐れ多しと雖て鎌倉の聞得もあれば此儘御通過も如何なり故に御從者一兩人を賜はりたし若くば御紋の御旗を下し賜はれよ御承引無きに於ては一矢仕つるの外なしと申出たれば宮も甚困じ給ひ腹心の從者を止むるに忍びず迚遂に金銀を着けたる日月の錦旗を庄司に賜はり漸く此里を通過し給ふ折節御供の一人村上彦四郎義光は官に後れ居たりしかば急いで馳せ來る道にて芋瀬庄司に逢ひ其下男の持たる錦旗を見て其出所を詰る庄司事實を以て答ふれば義光忽ち憤然として矢庭に御旗を奪ひ取り旗を持居たりし下男を投げ飛ばす事四五丈ばかり其怪力に驚きて庄司は惘然爲す所を知らず義光は錦旗を肩に懸け一散に馳せて宮に追付奉り跪いて仔細を言上すれば宮は甚く御喜びありしと云ふ

●『枕四句の趣旨』天照皇大神の御子孫の知し食す瑞穂國（我日本）は武勇忠義の人が往昔より多いとの意なり

●『大塔宮』後醍醐天皇第三の皇子にて御母、權大納言師親の女源親子なり尊雲法親王と稱し延暦寺の大塔に居給ひしにより大塔宮と云ふ後ち還俗あり尊邦又は尊形と云ひし事あり其後は護良親王と稱し元德二年三月二品に進められ給ふ

●『般若寺』京都より奈良に入るの要衝にて奈良坂の南に在り

●『逆臣』君に背くむほん人を云ふ

●『追討』賊徒を征伐する事討手を差向る事なり

天照す日の影うつる眞名井の流れ末清く
瑞穂の國は昔より武勇忠義の人多し
扨も元弘元年の頃かとよ後醍醐帝の三の皇子
大塔宮二品護良親王は南都般若寺に忍ばせ給ひ
逆臣追討の御謀ありけるが笠置の城已に陷りて
賊の勢日に募りければ天地廣しといへども
身を置き給ふ所なく熊野を指して落給ふ
御供の人々には律師赤松則祐
光林坊玄尊木寺の相模岡本三河坊
片岡八郎武藏坊平賀の三郎矢田彦七

●『熊野』紀伊國東牟婁郡本宮村に在り熊野本宮と稱す熊野早玉神社那智神社と為合せて熊野三社權現と云ふ熊野三山之なり

●『律師』僧都に次ぐ僧官昔時は五位に准ず

●『柿の衣』柿色の衣なり

●『笈』つゞらの類にて作り四隅に脚あり又開閉すべき戸を設け中には衣類書物などを入る修驗者や行脚僧などの背に負ふて旅行するものなり

●『兜巾』役行者が修行せし時の帽の破れたるに基くと云ふ十二因緣に象どり十二のひだあり修驗者の冠る小さき頭巾なり

●『先達』修驗者の峰入の時な

村上彦四郎義光かれこれ以上九人なり
宮を始め奉り柿の衣に笈をかけ
兜巾眉深に被りて先達に作り山伏の
熊野詣に裝ひたり龍樓鳳闕に長となり
華軒香車を出てまさぬ雲上人の御歩行は
長途いかにと思ひしに草臥れ給ふ御氣色なく
社々の御禱宿り〳〵の御勤
つゆも懈り給はねば勤修を積める先達も
見尤むる事無かりけり由良の湊を見渡せば
沖ゆく船の梶を絶え浦の濱ゆふ幾重とも

ど先に立て案内する經驗者を云ふ

●『龍樓鳳閣』禁裡の事を云ふ

●『華軒香車』貴人の乘り物を云ふ

●『雲上人』禁中を雲の上に喩ふ

●『社々の御祓宿り々々の御勤』社祠を見れば直に詣りて禊りを上げ宿に着ては勤行する事修驗者の常態にて宮も麓山伏とならせられたれば其通りに行ひ給へり

●『由兵湊』淡路國に在り

●『濱ゆふ』俗に濱おもとゝいふ海邊に生ずる草にて七八月の頃白花を開く其莖の皮多く重れり百重なすなどの古歌あり紀伊國熊野に多し霜雪を畏る海濱

しらぬ浪路に鳴く千鳥紀伊路の遠山渺々と
うす紫の藤代の松に懸れる磯の浪
和歌吹上を外に見て月に瑩ける玉津島
光も今はさらでだに長汀曲浦の旅の路
心を碎く習なるに雨を含める孤村の樹
夕を送る遠寺の鐘哀を催すたそがれに
切目の王子に著き給ひ叢祠に袖を片敷て
朝家の榮を夜通祈り申させ給ひつる
宮の御心おしはかり皆々涙に暮にけり
斯て十津川の戸野竹原をたよりて暫時居給へど

に在るものは枯れず種類も數種あり

●『遠山渺々』遠方に見ゆる山が涯り無くひろ々々と見ゆること

●『藤代』享保年中藤白に改むと云ふ藤白の松とて藤蔓之に纏ひ垂る其色白し依て地名となれり

●『和歌』和歌の浦にて昔時は一面の干潟なりしと云ふ

●『吹上』又砂山とも云ふ濱邊の白砂を吹上る故なり

●『玉津島』神社にて衣通姫を配祀せり

●『長汀曲浦』長きみぎは曲りたる浦長く續く海濱を云ふ

●『孤村の樹』此場合は田舍の村の樹木が雨後の景色を云ふ秋は

此所にも永く在りかねて高野の方へと落給ふ
斯る所に妹瀬の庄司とて賊に一味の侍の
宮を支へて申すやう此道通し申しなば
鎌倉よりぞ罪せられん さはいへ宮に弓引くは
如何にも恐れ多ければ錦の御旗たまはるか
さなくば一人の御供を留めて證據にせんものと
餘義もなげにぞ申ける股肱の臣を一人だに
如何でか殘し給ふべき詮方なくも御旗を
彼に與へて虎の口僅かに逃れ給ひけり
此所に村上彦四郎義光は草鞋の緒や切れにけん

淋しき情なり

●『遠寺の鐘』遠く響く寺院の晩鐘も秋は殊更淋しきを舒す

●『叢祠』くさむらの中のほこらを云ふ但し之は辻堂なり

●『片敷て』獨り寢の時片袖を下に布く事

●『朝家』帝室の御事

●『十津川』大和國吉野郡にて天の川の下流なり此川の附近一帶を十津川郷と云ふ山間僻地なり

●『戸野竹原』吉野郡大塔村殿野の戸野兵衛同郡同村辻堂の竹原八郎を指す

●『高野』紀伊國伊都郡に在る靈場にて其當時は高野山熊野三山吉野金峰山等寺院多く僧兵强大なりし當初大塔宮は僧兵を得んが爲に出家ぜられしと云傳ふる位にて延暦寺に在り又密教をも嚴修されしは之が爲か

●『妹瀬庄司』芋瀬に作る庄司は莊司にて莊園内の雜務を掌どる職名なり

●『鎌倉』此場合は執權高時を指す

●『股肱』最もたよりにする腹心の臣下なり

●虎の口『虎口に同じ非常に危難なる場合の事

●『朝敵』朝廷に敵する反賊を云ふ

●『怪力』非常に勝れたる力量

遙に後れたりしかば宮に追付申さんと足疾く過る折しもあれ妹瀬の庄司に行逢へり下部が立てたる旗見れば正しく錦の御旗なり不思議に思ひ尋ぬれば爾々の由答ふるにくわつと怒りて打睨み義光其と聞きもあへず忝なくも畏くもこはそも如何に何事ぞ天子の皇子の朝敵を四海の主君に在します御門出ある途にして御追罰あらん其の爲めに汝等如き奴原が左樣の振舞すべき樣やあると持たる御旗を奪ひ取り大の男をかい摑み四五丈ばかり抛たるは獅子の暴しに異ならず此の怪力に恐れけん妹瀬の庄司一言の答もえ爲で逃にけり義光御旗を肩にかけ程なく宮に追著きて御前に平伏し事の由具さに申上げしかば宮は誠に嬉しげに打笑はせ給ひつゝ北宮勳が勇氣にも立ち勝れりと愛で給ふ實に義光が動は御旗にあゝつたる日月に光爭ふ忠臣と語り傳へて萬世の鑑とこそは仰がるれ

佛御前

上

平相國清盛(淨海入道)の全盛時代は頗驕奢に耽り爲に悲劇も多かりし兼て祇王と云へる白柏子を召して西八條の館に入れ鍾愛せしが其比加賀國の者にて佛と名乘る白柏子あり十六才の妙齡に似ず歌舞の達者にて京洛中無双との定評ありしが時の權勢家相國入道に一度見えざるを不本意とし遂に意を決して清盛の館に詣る清盛怒て之を逐はしむ侍座せる祇女は同情に堪へず切りに勸めて執成したれば清盛漸く佛を召還さしめ今樣を朗詠せしめ又舞を見る其容姿藝能實に絕無なりしかば坐ろに意を動かし强て祇王を退け佛を館に止む祇王は三年間居馴れたる館を逐はれて出るとて(崩出るも枯るゝも同じ野邊の草いづれか秋にあはで果つべき)一首の和歌を障子に書き殘し直に二十一才にて尼となり嵯峨の奥なる山里に柴の庵を結ぶ妹妓女十七才母とぢ四十五才にて共に跡を慕ふて尼ゝなり專心勤修して後世を願ひしが其年の秋の夕佛御前も飽果ぬ世を厭けん密かに館を拔出で尼となりて祇王の庵室を訪ひ來り遂に四人同棲して穢土を厭離し淨土を欣求し往生の素懷を遂げたりと云ふ

さても平相國清盛の　驕奢暴慢を極めし頃とかや

●「相國」宰相の一名

●「驕奢暴慢」驕奢はおごり

ぜ、たくたる事暴慢、非道不法にてみだりなる事

●「悉色」みめかたちの美しき事

●「遺憾」殘り惜しき事殘念なる事

●「痴者」あはうと云ふに同じ

佛御前と名を呼ばれ　年は二八の彌生の空

綻び初むる櫻より　一層勝る姿色ぞと

世に稱揚るゝ白拍子ありけるが　一日ひそかに思ふ樣

いまだ太政入道に　聘されざるこそ遺憾なれ

イデ〳〵今日は館に推參なし　入道殿にまみえんと

聽て西八條の館に至り　其由斯と申入けるに

折節一門の人々寄集ひ　酒酌み交しおはしゝが

清盛聞きて大に怒り　賤しき身をも顧みず

自ら進みて來るこそ　無禮至極の痴者なれ

疾く〳〵追ひ返せと宣ひたり　佛御前は仰せを聞き

●『悄然』氣ゆるみて覺合の無き貌

●『同じ流を酌つれば』妓王も以前は白拍子なれば我身に比べて云へり

●『熊鉢』ねたみ、そねみゝ云ふ

●『わりなく』理無しなり此場合は限りなくと見るべし

そは情なの御諚哉と種々歎き申しゝも遂に御聞入あらざれば是非もなく〳〵恥を忍び たゞ悄然と退出けり 此時入道の寵愛淺からざる祇王といふ美人傍より清盛に縋りて申けるは我身も同じ流を酌みつれば他人の憂愁も量り知る殊に妾の此館に召置るゝ事佛も知りて侍るらむ情なく歸し給ひなば妾の嫉妬と想はれんもいと〳〵愧しうこそ候へあはれ一度召し給へかしと わりなく口説き申ければさすが我慢の清盛も祇王の計らひなればとて佛御前を呼び入れて

●『今様』七五調にて四切又八切より成りたる歌

●『姫小松』往昔は正月の初の子の日に小松引の遊あり其引く小松も段々に千代を經ると云ふ目出度き意姫小松は姫松なり

●『あでやか』上品なり

●『水干』水張りにして干したる絹にて狩衣の一種にて色は多く白なり白拍子は概ね水干を上に着て下に白き袴を着たりしと云ふ

●『朗詠』ほがらかにうたふと云ふ意にて和歌や漢詩などに節を

今様をぞ謠はしむ 君を初めて見る時は千代も經ぬべし姫小松 御前の池なる龜が岡に鶴こそ群居て遊ぶめれ 斯く折返〳〵三度謠ひければ入道卒かに興に入り さても聲の美しさよいざ舞を一番舞ひ候へと 左右を促し皷を打せ待居たり佛御前はあでやかに髪高々と結ひ上げて舞鶴繡へる水干に白き袴を着けたるは雲井に翔る蘆田鶴の天女を脊負ふ姿とも打仰がれて最と目出度や小松彩色る扇を揚げ朗詠の聲梁に澄渡り

付けて詠ふことも今様も然り

●『眷戀の情』『愛着の情』止め得ぬ事慰ひ慕ふ事

●『現ならぬ』『現』は心神の定かならぬ境にて本氣では有まいと云ふ意

●『只管に』それば かりはと云ふ如し一向に一途にと云ふも同じ

初子の例し今日此に誰か引くらむ舞の袖
靡くは萩の枝ならで戰ぎて散らふ秋の波
たゞよふごとに皆人は鎮まりてこそ居たりしが
清盛眷戀の情禁じ得ず祇王を排け佛の手を取り
強て傍に侍らしむれば佛御前はおどろきて
是は現ならぬ御事かな祇王御前の情に仍り
御目にも懸る事にて候へいかでさる事のあらるべき
免るさせ給へと只管に身を退りつゝ詫びぬれど
入道更に許し給はず汝祇王を憚るにや
さらば渠を逐むのみと佛御前の泣き悲しみて

●『一樹の蔭一河の流』諺に一つ樹の下に宿し一河の流を汲み合ふも皆これ他生の縁即ち先世の結縁と云へり

●『歌の意』萠え出て春に遇ふも秋の末より枯れ行くも共に野邊の草である秋と人情の飽とを掛けて自分と佛との境遇を詠めり

切りに諫止むるをも肯ず遂に祇王を退かしむ
いたはしや祇王御前人に情けは身の仇と
振り變りつる哀さよ假令一樹の蔭に宿り
一河の流を汲むとても別れはわきて悲しきを
況して三年の星霜に馴れにし宿をいかにせむ
去らむとしては躊躇ひつ泣かじとしても止め得ぬ
涙は袖にむらしぐれ紅葉にあらぬ筆染めて

萠出るも枯るゝもおなじ野邊の草
いづれか秋にあはで果つべき

いづれか秋にあはで果つべき　斯くなむ紀念に書き遺し

打萎れつゝ出てにけり　打萎れつゝ出でにけり

佛御前 下

さる程に祇王御前は我家に歸り事のよし尚ほも言葉を改めつ斯る憂目も見つるなり何を憑みて住ふべき朝露の置て消え行く命也未來の慶福を祈らむと散らして尼となりぬれば俱に無常を觀じけむ

詮方なみだ押へつゝ具に母と妹に語り聞し斯て浮世にあればこそはかなき此世と知るならば蜻蛉のあるかなきかの身を持てむしろ三寶に歸して惜し氣もなしの盛の花妹祇女も母とぢも浮世を捨てゝ嵯峨の奥

●「具に」おちなく又はてはしくもれなくと云ふ事

●「はかなき」果敢なきはかりそめに又はさだめなしと云ふ意

●「蜻蛉」蜉蝣も同じかげろふは春のうらゝかなる日に野邊などにちらゝ々立上て大氣にて遊絲とも云ふ蜻蛉は夏より秋にかけ水邊に陽炎のちらつく樣に飛び廻れども僅の間に死す故に人生の果敢なき事に引用す。

●「三寶」佛法僧なり他の曲の下に詳なれば略す

●「未來の慶福」先の世の仕合せよき樣祈る

●『無常』人生の常無き事
●九品、佛說に極樂往生の級等と三段に分ち上品上性より下品下性に至る故に九品なり其修行の懈らぬ事不退ば勇猛心の信心の怠らぬことを云ふ
●『十萬億刹土』佛說に西方十萬億佛土を經過したる處に阿彌陀佛の世界あり蓮華を以て成り諸事具足せずと云ふ事なし故に極樂と云ひ佛果を得たる亡者此處に往生すと云ふ
●『常樂我淨』佛語にて常に我心の清淨なる樂しむこと。
●『觀』物事を思慮分別する能力なり風嶺松を吹くより以下二句は古歌にも『觀念の心も澄めば山風も常樂我淨とこそ』きこゆなれと云ふ意なり。
●『六時の禮讃』六時とは晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜を指、阿彌陀經に晝夜六時にして曼陀羅華を雨らすとあり禮讃とは佛に禮して其功德をたたふるの謂なり
●『さばれ』遮莫の略言にて せんかたなければ、よしそ此上ほどうであらうとまゝよと云ふ如し
●『遠山の黛』眉の事なり眉を畫にて畫くを黛と云ふ
●悟道、道の眞理を悟る事即ち祇王が書き殘したる和歌の如く『いづれか秋にあはで果つべきの心により、我身の上を觀じて來れるなり。

往生院に庵を結び　三人菩提を欣ひつゝ
九品の行業不退なり　日西山に沒る時は
遙に十萬億の刹土を思ひ　風嶺松を吹く折は
近く常樂我淨の觀を凝す　六時の禮讃聲澄て
朝暮の念佛最と貴し　すでに春過ぎ夏來り
秋の初風吹き去りて　さらでも薄き衣手に
なぞ木枯のすさぶらむ　晝だに人も通はざる
憂き世の嵯峨の柴の戸を　訪問ふ音に訝かしみ
祇王内より問ひけるは　痛く夜更て訪ひ給ふは
そも誰人にて渡り候ぞと　言ふ聲聞て懷かしく

しか宣ふは祇王御前にておはさずや
妾は西八條侍り佛にて候也
御身と同じ道にも入らばやと　遙々尋ね來りたり
假令遺恨はおはすとも　さばれ仔細を聞き給へと
漸く庵室に入り來り　纏ぎし衣を脫ぎ去れば
遠山の黛は尙ほ消ねども　翠の黑髮は既に落ちたり
祇王等驚き顏見合せ　何と言葉も出でざりしに
佛御前は祇王に打對ひ　御身の遺し給ひてし
いづれか秋にあはで果つべき　是ぞ悟道の名句なり
移れば替る世の慣ひ　娑婆の榮華は夢の夢
樂み榮えて何かせむ　佛といふも名のみにて

●『法の道』佛教の道なり

●『諦』理由深し單に思ひ切ると見れば差支なし。

●『首肯』承諾の意を表して頭を前へ動かす事

●『發心』菩提心を起す事即ち急に觀ずる事ありて佛門に入る心の起る事

知らで過ぎ來し法の道　思へばいとゞ耻かしや
御身の誘ふ言の葉に　漸く悟りし愚かさよ
日頃の咎はさる事ながら　斯く諦めし上からは
御許し給へと泣き伏せば　祇王屢々首肯きつゝ
落る涙をせき止めて　今發心して尼と成り給ふを見
恨は露も遺り候はず　俱に素懷を遂げ申さむと
互に袖を搔き合はせ　よゝと計に伏し沈めり
實にや所も名にしおふ　往生院の柴の庵に
四人諸共こもり居て　朝な夕なの勤行懈らず
目出度往生したりけり　目出度往生したりけり

本能寺

一世の英雄織田信長は尾張國半國の領地より勃興し元龜天正の年間疾風迅雷的に活躍して諸豪族を討伐し天正十年の頃は既に領域は天下に半し官は正二位右大臣に上り鬼神の如く畏敬せられたりしが當時家臣羽柴秀吉は中國征討中にて備中國高松にて毛利家の大軍と對峙し頻りに援兵を請ふ信長自ら後詰せんと欲し諸軍に命を傳へ自身は近習五十騎上下合せて三百餘人にて上洛あり京都四條西洞院本能寺を旅宿と定めらる嫡子三位中將信忠は近習五十騎上下五百餘人にて同二條城に入る家臣明智日向守光秀（惟任と稱す）は豫て主君信長を怨むる事重りたれば好機逸すべからずと意を決し安土城を辭して途次愛宕山に登り心願を凝らし百韻の連歌を催ふし天正十年五月二十八日居城丹波國龜山に歸り六月二日の未明に京都に出で其臣明智左馬助光春に三千七百人を以て本能寺を圍ませ明智治右衞門光忠に四千人を以て二條城に圍ませ自己は三千餘人にて三條堀川に本陣を据へ諸軍の命を司どり遂に同日信長（四十九歲）信忠（二十六歲）父子を弑したり光秀は清和源氏の末流にして美濃國明智城主土岐光綱が子なり幼にして父に後れ諸國を流浪し軍學に長じ文武兩道に達す越前の朝倉家に仕官せしが當時の將軍足利義昭の美濃へ勤座の際其推薦に因りて織田家に仕へ機略縱橫の才を發揮して十七年間に累進し丹波國及近江國の一部とにて三十七萬石の大名となりし者なり。

●『枕四句』の意『戰國時代』互に朝夕馬を飼ひ立て兵士の武を練り兵糧を貯へ劍戟を磨いて一朝事有る時の用に具ふ實に麻糸の如く亂れたる元龜天正の年間なれば何れも常に注意せるを云ふ。

●『封』ぜられ家康國を領地とせられたる事。

●『右大將』『右近衛大將』を云ふ信長は當時右大臣なれば如何や

●『安土城』近江國蒲生郡安土山に天正四年信長の築く城なり。

●『鄭重』手厚き事『叮嚀』なる事。

●『饗應』もてなし、馳走、

麻と亂るゝ戰國の人とし云へば誰も彼も馬をやしなひ兵を練り糧を收めて劍を磨す頃は天正十年夏五月德川家康封ぜられ安土城下に入りしかば織田右大將信長は最と鄭重に迎へんと直ちに惟任光秀に饗應の役をぞ命ぜらる御請なせし光秀は亂れたる世に心得し都の手振見せばやと さしも目出度勤めしを小人輩の言により善美過分の評を受け疑心暗鬼は信長の胸に宿りし時も時羽柴秀吉中國より

●『善美』過分『光秀は諸事に心得あれば式作法を考へ十分に饗應せんとしたるに信長は家康を遇するの分に過ぎたりとて饗應使を變更したり。

●『疑心暗鬼』人を疑ひ訝かれば種々の妄想起る場合を云ふ。

●『嚴命』きびしきおほせ付なり此處は光秀に中國の援兵に出陣すべく命ぜられしをいふ。

●『あな』驚嘆の意を表はす言葉

●『粗暴』おろそかにてあらゝしネ事。

●『我意』自ら思ふ事を枉げぬ事。

●『志賀』近江志賀郡にて光秀の領地なり之を沒收して森蘭丸の望みに應ぜんとせる傾きあり

援けの兵を請しかば嚴命忽ち光秀の頭の上にぞ下りける光秀私かに思ふ樣羽柴が命に從へとは人もあらはに此の我に齒がみをなして恨みしはあな情なの我君やと よもあるまじき事なれど君に仕ふる人臣の右大將とも仰がるゝ身の亦信長を見る時は或時は蘭丸をして粗暴の振舞いと多く又或時は好まぬ酒を殊更に光秀が頭に鐵扇を加へさせ志賀の都の領地さへ我意を通して進めしめ心盡しの饗應も奪ひかへさん說を聞く

しを云ふ志賀は往時皇居の在りたりしを以て志賀の都と云ふ

●『動く睫毛より以下二句』光秀の人相に喜然骨あり喜怒共に甚しく動くと云ふ光秀の毛利元就に仕へんとする時元就其人を惜め共喜怒骨あるが爲に採用せざりしと云ふ喜怒骨あれば劇しやすし〻言傳へたり、光秀の飼が何んとなく大變の事を爲しそうに見えしをいふ。

●『一族郎黨』一族は同じ血統の者、郎黨は家の子、家來なり。

●『暴戻無道の弑逆』殘酷にして道理に戻りたる殺害をなせり弑逆はしぎやくの音便にて君父などを殺害する大罪を弑逆と云ふ。

●『烏羽玉の暗』眞暗い事しん

琵琶湖の水の泡と消え抑へし焰むら〳〵と燃る思ひの光秀が動く睫毛の間より由々敷大事のほの見えしを露だも知らぬ信長は諸將を安土に留めおき親から近臣百餘人引き從へて京都なる本能寺にぞ入りにける時こそ來れと光秀は一族郎黨を驅り集め暴戻無道の弑逆を企てしこそ淺間しけれ斯て士卒を打揃へ中國勢を援けんと僞り向ふ大江山心の駒の烏羽玉の暗に亂るゝ足並も東を指して進みける

のやみなり烏羽玉又ぬばたまは黑いことにて暗の枕詞なり

●『心の駒の烏羽玉』

●『露の身輕き』命を惜まぬといふ意

●『館』信長の居城に非ず此場合は本能寺の假旅宿を指す

●『見越』見越す例へば塀、墻より高く上より見越す故なり

●『桔梗の紋所』光秀は水色桔梗の定紋なり

●『謀反』君主又は主君に叛せて兵を起す事

時しも六月二日の朝まだき露の身輕き軍兵が本能寺を取りかこみ鬨をつくりて攻め入りける此の物音に信長は寢覺の耳を聳つれば紛ふ方なき人馬の聲館間近く聞ゆるにぞ枕を蹴つて立ち上り疾〻見届けよとありければ森蘭丸はかしこみて見越の松に走せ上り振りさけ見ればこは如何に雲か霞か白旗に染めたる桔梗の紋所見るより蘭丸引返し光秀謀反と答ふれば嚇と怒りて髪逆立て者共覺悟と信長は弓矢おつ取り立ち對ひ

●『弓手の腕に術手を負はれ』弓にて防がれしが弓弦斷れたれば薙刀にて接戰され腕に負傷されたるを云ふ

●『鼓を先途』大事の場所とて一生懸命に防戰する事

●『豪邁心猛けくすぐれたる事

●『大鵬』鵬は想像上の大鳥にて鯤の化したるもの其翼の徑三千里常に南冥の激浪を擊たん事を圖ると云ふ故に圖南の志と云ふ

●『燕雀の爲に惱まされ』燕雀

寄せ來る敵を物ともせず　瞬く隙に數十騎
矢繼早に射て落し　勢ひ鋭く防ぎしも
賴む弓絃フッと切れ　左手の腕に痛手を負ひ
蘭丸始め宿居の面々　茲を先途と戰へども
衆寡敵せず信長は　早や是迄とや思ひけん
自から館に火を放ち　烟の中に飛び入りて
双に伏してぞ果にける　噫豪邁の信長が
空をも蓋ふ大鵬の　圖南の翼中空に
燕雀の爲め惱まされ　終生の望み絶えたるは
獅子身中の虫に斃れたる　謗りを口碑に傳へけり

はつぱめ、すゞめ等の小鳥なれば小人物に喩ふ即ち信長が天下平定の功業半にして光秀の爲に狀せられたるを云ふ

●『獅子身中の虫』内より禍ひの出たるを云ふ獅子の如き猛獸も自己の身中に在る虫の爲には衰ふるを云へり佛書より出づ

●『まだうら若き稚兒櫻』以下四句　近習の青年の勇士は皆三月に開く人の花なり然に山嵐が誘ひ來て櫻花の散る如く俄に光秀の軍に襲はれて何れも素肌の儘奮戰し床しき譽れを殘して戰死せしを云ひたるものか。

●『王侯』王も侯も人に君たるものなり此場合は人君を指す。

續いて蘭丸を始めとし　坊丸力丸の小姓ども
まだうら若き稚子櫻　嵐の山の朝風に
いとも床しき香をとめて　散るやちり〳〵後や先
百有餘人諸共に　あはれ本能寺の烟と消にける
倩ら〳〵古今を按ずるに　人に君たる王侯の
心すべきは德にこそ　こゝろすべきは德にこそ

辨の内侍

國に二朝あるは天に二日あるが如し南北朝の時代は實に空前の不祥事なりし當時北朝は京都に在り南朝は吉野に在り吉野の官中に仕へたる辨内侍は右少將俊基の女にして才色兼備の譽れ　頗高し北朝の武將足利家の老臣高武蔵守師直は内侍を懸想する事久しく戀々の情を盡して送る事數々なるも内侍は手にだも取らず師直彌思慕に堪へ兼ね内侍の伯母婿行氏の北朝に仕ふるを以て甘言にて之を利用し同家の侍女梅ヶ枝を借りて事を計らんとし腹心の武士二十人許を副へて之に從はし梅ヶ枝は吉野に詣り内侍に見えて行氏の北の方の書面を出す曰く久しく相見ざれば是非面語せんとす附近の高安（地名）に待つと内侍は大に喜び母に別れて以來は母の樣に慈しみ玉へる伯母御の御情は忘じ難しとて少時の御暇を請ひ女房二人青侍三人を從へて山を下る途次二十人計りの武士出でゝ輿を圍みたれば心敏き内侍は疾くも悟りて直に輿を還さしめんとす圍みたる狼藉者は三人の青侍を斬り捨て女房を谷に突き落し輿を奪ふて進んで石川に達す恰も好し楠正行吉野より召されて來るの途に邂逅す正行大に不審し糺して實を得從士に命じて手向ふ者を斬り餘は悉く縛して吉野の宮に詣る奏して梅ヶ枝は髪を斷ちて京都に追ひ還す　主上敕して内侍を正行に賜はんとす正行丹心國家に許す事一日の故に非ず依て「とても世に存ふべくもあらぬ身の假のちぎりをいかで結ばん」一首の和歌を以て辭し奉る後ち四條畷に於て正行の戰死するや何れも思ひ合せて惜み悲む内侍は殊更悲歎に暮れ爭でか餘人に見えんやと終に髪を切りて尼となり大和國龍門の里に隱れて終世正行の冥福を修したりと云ふ

●『吉野山』大和國吉野郡に在り有名なる櫻花の名所にして一日千本の稱あり

●『内侍』最高位の女官なり

●『黒木の御所』黒き木にて作りたる宮殿

●『君雲隱れ』後醍醐天皇の御崩御を指す

世は苅菰の引はへて　亂れがましき折からに
何を頼みて吉野山　花より外に知る人も
あらぬ夕の風をいたみ　一目千本の花の雪は
誰が身にとてか積るらん　去る程に辨の内侍は
先帝後醍醐天皇の　御側近く仕ふまつりて
黒木の御所に在せしかど　君雲隱れの其後は
伏家の軒に行く春の　うら淋しくも居給ひける

●『我れ高安以下五句』行氏の室即ち内侍の伯母の文なり御身に逢はんとて道芝を踏で來た露に道芝は起き臥しするもの故安否を氣遣ひておきふしの模樣を聞く爲に逢ひに來たとの意

●『卯月』陰曆四月の異名

●『歸るに如かず』時鳥の異名にて不如歸なり

●『喬樹以下四句』喬樹は高い

折ふし三位行氏の室
我れ高安の郷にあり
思ふこゝろを先に立て
露のおきふし聞かばやと
内侍は嬉しさ限りなく
侍三人侍女二人を
時は卯月の末つ方
色もかはりて大和より
歸るに如ずと鳴く鳥の
喬樹は空を打蔽ふて

即ち姨君より使者來りて
今日しも御身に逢はなんと
袖にしられぬ道芝の
御文さへも賜ひしかば
使の者に誘なはれ
召具してこそ出給ふ
白雲かゝるみ吉野の
河内に續く青葉山
聲さえ凄き木下闇
鳥路認むるに由なく

木にて茂り合たる深山の樹は空を蔽ひて木下闇となり鳥の飛び行く先も認め難く溪の千草は露を結んで館の行通ふ道だけ幽かに見ゆると云ひて深山の景を叙したるものなり

●『悲鳴』此場合は女のあはれなる泣き聲を指す

●『小具足』鎧の胴を略して他は皆着用せる場合を云ふ

●『直衣』昔庶人の服し後には堂上の人も着用す紗、絹等にて作る

●南朝の柱石南朝にて柱と

溪毛露を結むで
左も恐ろしき道邊より
有無をも言せず拔つれて
侍女を谷間に突落し
何處ともなく去らんとす
遙かに悲鳴を聞つけて
馳せ來りしを誰とかなす
小具足着たる其上に
黄金作りの太刀を佩き
あつぱれ威ありて猛からず

熊徑最とも幽かなる
現れ出たる夥の猛者
侍三人を其場に斬棄て
内侍一人を手早にして
此時遲く彼時早く
二三の家來從がへつゝ
年は二十と二三なる
萠黄錦の直衣絞りて
烏帽子戴く其有樣
是こそ南朝の柱石として

もいしず丞とも顧む臣と云ふ意なり 楠氏は正成正行正儀の三代貫に南朝の柱石たりし

●『帶刀』官名

●『垣間見て』物の隙より密かに覗き見る事

●『略奪』かすめうばふ事即ち内侍を奪ひ取らんとせし事

二代の忠臣一世の英雄楠河内の判官が一子同苗帶刀正行なれ事の情は知らねども先づ曲漢を撲据えて使者を糺せば怨敵たる高の武藏守師直が辨の内侍を垣間見て日來の野心遣瀬なく遂に略奪を企てつゝ斯の通と言けるにぞ言語に斷たる振舞かなは是よ者共と目くばせのそれと同時に閃く白刃十個に餘る敵の首級は水も溜らず落にけり内侍は徐ら正行に向ひ親しく御目にかゝれるは今日を初めの事ながら御身は大將楠殿

●『朝臣』朝廷の臣下を朝臣と云ふ四位以上の爵位ある人の敬稱なり

●『上藹』二位又は三位の典侍の稱なり要するに身分貴き婦人を云ふ

●『恍惚』物事に心を取られうつとりとなる事

●『九重』禁中の別稱支那にて天子の位置を九天にたとへたるより名づく

●『伉儷』配遇即ち夫婦の事

正行朝臣とこそ見參らすれ若も救はせ給はずば妾は敵將師直が爲に此上無き辱め受なんに危き難を遁れしは偏に御身の情ぞと花も羞らふ上藹の謝する言葉の口に袖あでやかなりし風情には師直ならぬ人だにも恍惚として答ふ可き術さへ更に知らざりき此事速くも九重の雲井の上に聞へしかば是こそ奇しき緣ならめ何れ劣らぬ伉儷ぞと忝なくも主上より婚事の御沙汰ありしかど天下の大事を身に負て心に期する事あれば

●『和歌の意』何時迄も存命すべき考は無い一死君國に報ずる志一有る其時若い人の方針を誤ちする樣のものなれば假初のちぎりはどうして結ばんやと云ふ意

●『冴げき』異にてきはだちて又ことなりてと云ふ事

●『一念希求』一心に正行の冥福を願ひ求むる事要は山中に庵を結び鳥獸の聲を菩提の友とし松風の音松にからむ蘿に照る月などに心を澄まし菩提を祈る事

本意なく辭ひ奉り
とても世に存らふ可くもあらぬ身の
假の契りを如何で結ばん

一首の和歌を詠じつゝほゝ笑みながら退ぞきし
世にも冴げき大丈夫が心の内の雄々しさよ
堰れて募るは水の常成らでまさるは戀ぞかし
正行戰沒と聞し夜半明るも待たで黑髪を
剃こぼちたる尼法師吉野の奥に墨染の
袖も寒げき山おろし鳥の音獸の聲さへも
一念希求の友として松風蘿月永しへに

一期を送り給ひしこそ
あはれ儚なきためしなれ

虎御前

鎌倉幕府の時代には大磯小磯泊匂など狹斜の巷にて遊君多かりしが大磯の長者菊鶴が女虎御前と云へるは絶世の美人にて其評判は遠近に高し然に端無くも曾我十郎祐成と深く契り居たるに建久四年五月二十八日の夜十郎祐成弟五郎時致と富士の裾野の卷狩を幸ひ井出の里にて亡父の仇工藤祐經を討て十八年の宿怨を霽らし尚刃向ふ武士と奮闘し三百餘人に負傷させ拔群の働きをなしたる後ち十郎は仁田忠常に討たれ五郎は御所の五郎丸に捉はれ、其翌日遂に斬に處せられたれば之を聞きたる虎御前が悲歎は限りなく曾我の里に行きて十郎の實母に逢ひ箱根に登りて別當阿闍梨を戒師とし落飾して禪修比丘尼と云ふ時に十九歳なり直に行脚僧となりて富士の裾野に至り井出の里に亡き人を偲び次で京都奈良難波寺の靈場を巡り歸途復井出の里を訪ひ再ひ曾我に赴きて兄弟の一回忌を營み其遺骨を頸にかけて信濃國善光寺に詣りて納骨し夫より故郷に歸り大磯の高貝寺畔に艸庵を結び生涯貞操正しく十郎等の後世を弔らふの外なかりしが嘉祿三年六十四歳にて終りたり法名を法虎妙忌禪尼と云ふ今日に至るも虎が兩の名と共に貞女の龜鑑として稱揚せるは良に由ある哉

●由井ケ濱　鎌倉附近の海濱

●稻村ケ崎、大船、藤澤　何れも地名相模國にて名高き處なり而して各句共ゆかりある句を以て地名を出せり

●大磯、相模國中郡に在り

●芳名　かんばしき名よき評判

●二八の春　小ゆるぎや二八の春は十六歳の春なり小動ぎは小磯の地を出すためと十六歳迄越え來りしを云ふかけ句なり

●揚羽の蝶、五郎が衣類の模樣

●村千鳥　十郎が衣類の模樣

●祐成　曾我十郎祐成にて河津三郎が遺子なり後ち母は曾我

由井が濱風吹くからに　聲うちそふる夕浪の
音なふ汐にいざなはれ　いざ稻村が崎遠く
ほのかに見ゆる大船や　ゆかりの色の藤澤を
こがれて渡る百千船　出船入船賑はしや
戀のみなとの大磯に　芳名千里の外までも
きこえて高き虎御前　二八の春をこゆるぎの
小磯の濱の櫻がひ　今ぞ盛りの花の香に
くるふ揚羽の蝶ならで　なぎさにあさる村千鳥
啼く音に潮のみちとせの　ちぎりも深き祐成と
掻き合したる衣紋坂　離れがたなき仲なりき

祐信に再嫁す故に曾我を姓とす
●『和田左衞門尉義盛』始め小太郎と稱す侍所の別當たり
●『驕』傾横柄なる貌
●『不興』興味の醒むる事機嫌を損する事なり

●『禍福』わざはひとさいはひとの事にて今權勢あく義盛に從ふが得策にて目蔭者の祐成に盡すは不利益なりと母が諭ぜる語
●『然宣ふは以下九句の意』虎御前が答にて祐成は仕官もせぬ部屋住の日蔭者にて義盛は別當職にある權勢の强き人なれば辿もくらべものにはならぬ然れども賞いらぬ山吹とて後れを取らする譯一行かぬ一旦思ひ込だる上は女郎花は夫だけの義理と意

爰に和田左衞門尉義盛は郎黨數多引連れて虎が館に花の宴開らく武運に驕顔屢虎御前を招けども義盛不興を催せり斯くと聞くより虎御前の母なる人は大に恐れ子を思ふ親の眞心より禍福を諭し給ひければ虎御前キット容儀を改めて然宣ふは無理ならねど祐成殿は日蔭の御身今鎌倉中の權威たる和田殿と比較なば貧富の相違ありつれ共實の無き色の山吹に意氣地といふは此ならむ

おくれ取らさぬ女郎花

路とを立通す故に御免下されと云ふ意

●『やがて木の間以下五句』虎御前の容色を稱へたる形容詞なり

●『さすがおもはゆく』盃をさすと流石とかけ両して思ふ男にと言はれ祐成に杯をさしたれば流石に羞しく顔を染めたる風情を云へり

許し給へと泣き伏せば强る言葉も出でざりけり
去程に義盛は祐成此家にあると聞きさらば祐成共々に
虎御前にも來よかしと義盛頻りに待ちければ
やがて木の間を洩れ出る影さへ匂ふ夕月の
霞の衣綺羅姿比類もなしの花一枝
雨を帶びたる風情なり義盛虎御前に杯を勸め
卿のおもふ殿儕に其盃を献すべしと
言れてすぐに祐成に盃さすがおもはゆく
顏に紅葉の散らし文戀路は斯くぞと讀まれけり
扨も其後虎御前は曾我兄弟の死せし跡

●「曾我兄弟の死せし跡」兄十郎祐成、弟五郎時致は實父の仇工藤祐經を建久四年五月二十八日の夜富士の裾野巻狩の節陣屋に忍び入り仇討をなしたるを云ふ

●「眼の意」露と消えたる祐成兄弟の跡に訪ね來て見れば尾花に秋風が吹き渡るのみなりと云へる淋しき情を云ふ

ねんごろに弔らはんと　おもひ染にし黑衣
富士の裾野にたづねゆき
露とのみ消えにし跡を來て見れば
尾花が末に秋風ぞ吹く　斯なん手向け高麗寺の
草の庵に身を埋め　行ひ清まし終りけり
行ひ清まし終りけり

知盛

平家は壽永二年七月に京都を落ち行きてより以來復も四國中國等にて勢力を得攝津播磨の國界なる一の谷に城廓を構へ京都を回復すべき根據地となせり然に元暦元年二月七日の源氏の總攻撃に源義經の鵯越を下りて攻入りたる奇襲の爲に脆くも落去し東西北の三面は源氏の軍に肉薄せられ豫て南面の海上に準備したりし船舶に主上を奉じて乘り移りたり折しも新中納言知盛は稍後れて須磨の濱邊に赴く途次に武藏の兒玉黨三騎追ひ迫る知盛の家臣監物太郎頼賢遮ぎりて之を防ぐ知盛の一子武藏守知章生年十六歳父の危急を見て忽ち馬を返し來り敵を支へ其一騎を討て遂に敵の爲に獲らる賴賢も重き矢傷を負ひて自殺す此間に知盛は馬を海中に騎り入れ三丁餘を泳がせ味方の船に達す然れども船狹ふして馬を立つべき餘裕なし仍て陸地の方に引向け鞭を加ふれば馬は渚に上り主を顧み三度嘶く恰も跡を慕ふが如し井上黑と云へる名馬にて後ち義經に獲られ院の御所へ献りしと云ふ

知章は父を救はんとして戰死す而して父は道るゝ事を得たり淨海入道清盛の子として又平家の一門中にて智勇兼備の譽れ有る知盛としては甚不合理なるが如し然れども　主上の御座船に在すあり父子の私情を捨てゝ君家の難に赴く實に大義を誤らざるの大丈夫と稱すべき而已

●『金谷の花』習の石崇金谷園を設けて綠珠と云ふ美女を愛し花を賞し奢を極めし處なり後攻められて綠珠と共に怨ち亡びたり

●『南樓の月』樓はたかどのにて二階三階に作りたるもの月を賞する好軌道の關係上南樓とせり

●『金谷以下四句の大意』金谷に咲き匂ひたる花も無常の風に誘はれて永く保つ事能はず南樓にて賞ぜる秋月も人生の生滅無常なる有爲の雲に蔽はれて皎々たる光も曇るゝものなり花を見月を賞して歌を詩に詩を吟じ居るも驟も永く榮華は保ち難く無常の風に誘はるゝを云ふ

●『生田森』神戸市の三宮以東の

金谷の花も無常の風に誘はれ南樓の月も有爲の雲に隱れり
花に詠じ月に吟ずる輩も月花におくれ先だつ習なり
因果はめぐる小車の榮えし春もすぎ木立
生田の森は名のみにて死出のたびぢの首途に
身を知る雨ぞ降りしきる扨も新中納言知盛は
蒲の冠者範頼に散々に打ち成され
嫡子知章にも引き分れこゝろぼそくも唯一騎
濱邊をさして落ち給ふこゝろの中や鳥羽玉の
闇路にまよふ蘆田鶴の行きぞわづらふ風情なり
かゝる所へ源氏の兵團扇の旗さしかざし

地を生田と云ひ現今の生田神社の地は一の谷城東門の在りし處其後は生田森なり

●『蘆田鶴』鶴は多く芦の生ぜる水邊に居る故にあしたづとも云ふ矢弦鶴の事なり

●『行きぞわづらふ』此の時の知盛の狀態を芦田鶴が闇夜にまよふて何れに行くべく立ちなやめる樣に例へたるなり

●『團扇の旗』うちはの形に作りたるはたじるしなり

●『散る露』露は主に秋にて夏季よりは結ぶ事を得二月の戰ひに如何や玉を欺くを出す爲か

●『苅藻川原』

●『私情』私しの情義即ち知盛が我子の爲め自分まで討死せ

五六騎ばかり追ひ縋り已に間近くなりけるが
折もこそあれ知章は森のかげより馳せ來り
父を討たせじと押隔て父上あやふく候ぞ
此所は我等に任せられ疾々御落延び給へかしと
いふ隙さへもなきなたを揮り翳しつゝ戰ひしが
むらがる敵に圍まれてあはれはかなく知章は
修羅の衢に散るつゆの玉をあざむく粧も
苅藻川原に住む虫と俱に音を絶え失せにけり
去程に知盛おもふやう今此所にて返し戰ひなば
我亦ともに危ふからむさりては私情のため

ば君の恩に報ずることが出來ぬといふ意

●『本分』書すべき義務

●『とみに』急に又はにはかにと云ふ事

●『御ふね』主上の在す處を御座と云ふ　安德天皇の乘御の船を指す

●『鬣』立髮の義馬の首に生じたる長き毛

●『渚』水際　即波打際なり

君恩に背くおそれあり
是れ戰場のならひなり
臣たる者の本分なれと
涙をふるひこのひまに
ザンブと馬を乘入れて
難なく着かせ給ひしが
馬立つべうもあらざれば
宛然人に物言ふ如く
別を惜みたまひつゝ
馬はしばゝふりかへり

子を討たせしは殘念なるも
君の御先途見奉るこそ
とみに心を決しけむ
やうやく落延び海中に
沖にうかべる御座船に
船にはすでに人おほく
せんすべなみに知盛は
馬の鬣撫でさすり
渚の方に追ひかへせば
ふたゝび三たび嘶きて

●『くが』陸地なり

●『越鳥南枝に巣をかけ』越は支那本部の南國なれば越國の鳥は温暖を慕ひ北地に行きても木の南の枝に巣をかけ故郷を思ふと云ふ意

●『胡馬北風にいばえしも』胡は支那の北方の地なれば胡より來りたる馬は北風に向て嘶くと云ふ望郷心なり

●『大臣』内大臣宗盛なり知盛の兄にて平氏の宗家を繼げる人

●『仔細』ことわけゝ見るべし

漸くくがにのぼりけり
胡馬北風にいばえしも
胡馬は北風を慕ひけむ
纜にしもともなはれ
思ふ氣色のあらはれて
漸くにして知盛は
涙をおさへ申しけるは
すでに危き其ところを
天晴れかれは討死候ひぬ
敵を支へてたゝかふを

越鳥南枝に巣をかけ
舊交をしのぶ故ぞかし
此馬は西海に往く船の
主に從ひゆかばやと
哀にこそは見えにけり
大臣の御前に出でさせて
我等今しも敵に迫られ
知章にすくはれしが
子はちゝを討たせじと
假令いかなる仔細あればとて

●『愛憐の情』あはれみいつくしむこゝろ
●『慚愧の心』はぢ入る心

●『村雨』夕立等の如くにはかに一としきりづゝ降る雨
●『ありそ海』荒磯の海を云ふ『平治』年間に源氏に平家が仇せし報ひがありとありそ海とかけたる句ならん『平家』が仇せしとは平治の亂に清盛は勅を奉じて源義朝と戰ひし事を言へるか

子の討るゝを他所に見てをめ〳〵遁れ候やらん
いと愧しうこそ候へと愛憐の情慚愧の心
一度に胸にあふれ出で言葉も咽喉に押し迫まり
むせび入てぞ歎きけるなみ居る人の袖の上に
ふるは涙かしらつゆかそれかあらぬか玉あられ
あらしのさそふ村雨の松にかゝれる如くなり
平治の昔みなもとに仇せし報いありそ海の
そこともしらず鳴聲をあやしときけば淡路島
かよふ千鳥の影のみぞ涙間隱れに殘りける
浪間がくれに殘りける

千早城

忠臣の模範として戰術の龜鑑として赫々たる芳名を千載に薫らせたる大楠公正成は河内國南河内郡赤坂村水分字山の井に生る其居館の西側に樟樹多きを以て楠を姓氏とす元弘元年八月　後醍醐天皇の勅を奉じて赤坂城を築き義旗を飜へす然れども事急にして糧食の準備乏しく一旦城を開いて潛伏せしが翌二年四月再赤坂城を復し攝津國住吉、天王寺等に出で戰ふ次で金剛山に築く山は河内大和の國境にて南河内郡千早村の東に在り千早城と稱す（又千劔破城に作る金剛山城とも云ふ）天險の要害なり自ら之に居り赤坂城には部將平野將監を置く此時護良親王は吉野に籠城あり鎌倉の執權北條高時は大に驚き兵を京都に集合し大軍を以て之を攻めしむ元弘三年正月晦日二階堂入道々蘊は六萬餘騎を以て籠城し平然として眼中敵無く東軍（北條軍）勇を以て逼れば智を以て破り術を以て攻れば策を以て摧く荏苒曠日東軍策の出る處を知らず諸道の官軍風を望んで爭ひ起ち名和長年は、主上を船上山に奉じ足利高氏（後の尊氏）は京都を復し新田義貞は鎌倉を定む此に於て金剛山の重圍始めて解く實に同年五月なり建武中興の基礎を固めたるは蓋し正成の偉勳と謂つべし

●『天の時以下二句の意』孟子に在り要は時日天候等の宜しきを得るも土地の要害に加かず要害宜しきを得るも人心の一致和合には如かぬと云ふ意なり

●『旌旗』ほた、のぼり等戰陣に用ゆるもの

●『劍戟』つるぎ、ほこ、

●『坤軸』坤は大地の事、軸は廻轉等の中心點なり略言すれば大地のしんと云ふ如し大軍の鬨の聲震しく爲に大地も裂くる樣なりと云ふ形容詞なり

天の時は地の利に如かず
天既に定り地の利に據り
假令阿修羅の軍勢も
去程に金剛山千破劍の賊は
ひた寄に寄たりしが
吉野赤坂の勢も馳加はりて
旌旗は風に飜り
大軍の近づく處
鬨の聲震ふとき
爰に城將楠判官正成は

地の利は人の利に如かずとかや
將卒相和し志同ければ
如何でか是を破るべき
兼て關東八十萬の軍兵にて
たやすく落べくも見へざれば
今は百萬騎にぞ餘りける
劍戟は日に輝きて
山勢爲にうごき
坤軸忽ち摧けんとす
更に此勢にも恐れをなさず

●『不敵なれ』眼中に敵無く大膽にして恐れぬ事

●『かつぎ連てぞ』矢を受ける楯をかつぎて上るの意

●『微塵』細かきほこりを云ふ最小分子なり此處にては敵兵散々に打すくめられ楯板もばらばらに碎かれたる事

僅に五六百の人數にて
心の程こそ不敵なれ
我こそ先に乘取らんと
かつぎ連てぞ登りける
武士の操のいや高き
天威に重き大石を
鎧兜は打ち破られ
ためらふ處をさしつめ引つめ
寄手は進退きはまりて
重り合ふて死する者

小城の内に立籠る
寄せ手は之を見侮り
城の木戸口の邊り迄
され共城中少しも騷がず
櫓の上より見下ろして
投げかけ〳〵防ぎければ
楯は微塵と碎かれて
隙もあらせず射たりけり
四方の坂より轉び落ち
幾千人とぞ聞えける

されば長崎四郎左衛門之尉　此有様を打見やり
心ばかりは逸れども　如何に詮方もあらざれば
よそにのみみてややみなんかつらぎの
たかまのやまの峯の楠の木

●『遠巻』寄り附かぬ様に遠くから取り巻く事

空しく城をうちながめ　唯遠巻に取まきたり
城中も之にはヒタト打悩み　心を遣る方もなかりければ
大将正成はいざさらば　寄手の眠りをさまさせんと
藁くずを取集め　人長の人形二三十を作り
甲冑を着せ兵杖を持せ　夜の間に城の麓に立せ置き
前に疊楯をつきならべ　後に勝れたる兵共

●『疊楯』疊を突き列べて矢受の楯の代りとなすを云ふ

四五百人をぞ立せける　夜はほの〴〵と曉の
霞たなびく奥手より　ドット上げたる鬨の聲
寄手は夢を破られて　スハヤ城より打ち出たるぞ
敵の運の盡るところ　正成が死物狂ひ
ソレ打取れとひしめきて　我先にとぞ攻め寄せける
正成此様を見すまして　存分に敵を相近づけ
木間〳〵に人形をのみ　殘し置きてぞ引登る
寄手は殘れる人形を　眞の兵ぞと心得て
これ打取らんと集りければ　時こそよけれそれ打てと
兼て準備の大石を　四五十一度に投げ落せば

●『ひしめく』騒ぎ立ち押合ふ貌なり
●『存分』思ふまゝに

忽ち三百餘人討殺され　五百餘人ぞ手負ひける
軍もはてゝ見渡せば　尚ほ一と足も退かぬ
天晴大剛の兵の　身動きせぬもことはりや
秋の山田のそれならで　君に仇なす鳥けだものを
おどす案山子の心とも　知らで寄たる烏雀の群
討死せしも高名ならず　進み得ざるも臆病の
程あらはれて淺間しや

明籌奇策不可摸　正勤王事是眞儒
思君一死七生語　懷此忠魂今有無

嗚呼君が此忠魂　開きて萬朶の花となり

●『秋の山田』秋は稔る故田圃に案山子を立てゝ鳥の啄むを防ぐ
●『案山子』藁偶像に竹の弓を持たせて鳥を劫すもの
●『詩の大意』明かなる　餘ふしぎなる　嫁眞似はされぬ正に皇室の事に勤むる眞實の天地人に通ずる人なり君が淡川戰死の時に七度人間に生れ變りて國賊を滅ぼさんと言はれたが斯樣に忠義に厚い　魂の人が今日有るか無いか知も有るまいと云ふ意

凝ては堅き金剛の　山下かげに今日もまた
杖を停めて橘の　玉階の下にかほりけむ
昔を回へば山彦の　答ふる物は時、鳥
血に啼く聲のをちかへり　をちかへりつゝ長へに
古事をこそ語るめれ　ふるごとをこそ語るめれ

●『萬朶の花』澤山の朶に咲く花
●『凝ては堅き金剛の』凝結すれば堅固だる金剛又は金剛石の如しと云ふ事金剛は堅固にして破れざるの意要するに此二句は正成の勳業は萬朶の花の如く美しく金剛の如く末代迄名譽は朽ちぬと云ふ事金剛は金剛山にかけ句なり』
●『山彦』山に音聲の響く反應なり谺と同じ
●『時鳥』ひよどりよりも瘠せて尾長し　鶯の巣に卵を生みて之に孵化させ　變はしむと云ふ冬月は深山に蟄し初夏の比より出でゝ啼く其聲哀れなり吻に血有り草木に漬す故に血を吐く鳥と云ふ此他異名數十有り

筑後川

菊地氏本姓は藤原氏にして長和年間中納言隆家太宰帥となりて西下し其子政則頗勇武あり政則の子則隆始めて肥後國菊地郡を賜はり菊の城を修めて之に居る子孫仍て菊地を氏とす則隆十三世の孫武時入道寂阿は元弘三年王事に斃其子、武重、武救武士武光あり武光の子武政あり武政の子武朝あり始終一貫南朝の爲に盡して美名を千秋に垂る。

南朝の正平十四年七月菊地武光士卒八千を率ひ征西將軍懐良親王を奉じて太宰府を攻めんと欲し進んで筑後國に至り高良山、柳坂、水縄山の三處に陣す少貳頼尚兵六萬を以て筑後川の畔に陣し邀へ、戰はんとす武光遲疑せず川を濟りて迫る頼尚佯はり退く事三十餘町大原に至りて留まる武光急に之を追ふ沼廣く泥深く其間僅に一徑の通ずるあるも敵軍固く遮れば進むに路無く行くに術無し對陣數旬八月十六日武光は精兵三百を以て奇兵となし間道より敵の背後を襲はしめ自ら兵を分ちて三隊とし夜陰に乘じ河畔に濟ふて進む大江の水聲囂々として人馬の響を奪ひ渴すれば鮮血啜り惡戰苦鬪夘の刻（午前六時）より酉の刻（午後六時）に至る敵を斬る事四千と稱す頼尚終に敗れて筑前國寶滿山に走る之より九國の官軍復大に振ふ

附言本歌山中敵將は足利義滿と有り然るに當時は義滿の父義詮將軍にて義滿は此後より數年後に將軍職を襲ひたり且義滿の九州へ下向せし事蹟を知らず依て諸書を參考し菊地と少貳との筑後川に於ける戰鬪を以て解説する事とせり。

●『みよし野以下六行の大意』南朝は吉野に在り故に三吉野の月も朧など喩へて掘はざるを云ふ北風は北朝の足利軍を指す菊水の旗は楠氏を云ふ建武中興に與かりたる功臣も追々に逝きて夜明の星の次第に消え行く樣に光を失ひたる意如意法輪は如意輪法には無きやと思はる當時は佛教旺盛の時なれば如意輪の秘法を修するは有り得べき事にて之も利益無しと見るの外なし

●『梓弓』矢たけ心を出すための枕詞に引用せり

●『菊池飽託』共に肥後國に在る郡名なり

みよし野の月は朧に打霞み　南の空は黒雲や
北風荒く吹きすさび　如意法輪の影暗く
流れも清き菊水の　旗もいつしか色失せて
天運時に拙なきや　建武中興の功臣も
野邊の草露落ちはてゝ　曉近く天津空
星の數々斷々に　消え行く樣ぞ是非なけれ
かゝる中にも君がため　心つくしの梓弓
矢竹心の一と筋に　心も赤き肥の國の
菊池肥後の守武光は　父兄の業を墜さじと
菊池飽託に立て籠り　竊かに中原を窺ひしが

●『中原』中央と見るべし

●『鎮西』九州の總稱往昔は筑前國太宰府の別稱なり

●『叡慮』主上の御思召を云ふ

●『明國』今の支那にて以前を淸國と云ひ其以前を明國と云ふ

●『八島』大八島に同じ我邦の事なり

●『屈竟』最もすぐれたる事

●『延文三年』延文は北朝の年號にて同年は正平十三年に當る相違なるべし

吉野の帝聞し召し忝くも式部卿一品の宮懷良親王を遣はされ鎭西の兵をぞ召されける武光叡慮畏みて軍備に怠りなかりしが時しも來れる明國の使節を却け我國の武威を八島の外に輝かしされば足利義滿之を聞き勢雄々しく見えたりけりやがて自ら將として心ひそかに安からず九州さしてぞ打立ちける六萬の大軍を引率し好哉來れいざさらばと此時菊池武光は屈竟の將卒八千を選び延文三年文月中旬駒の心も十六夜の

●『駒の心も十六夜の』時は八月十六日なれば駒のいさむといざよふとかけたり以下二三句は筑後川の景を叙したり

●『鞍坪』前輪と後輪との間にて人の乘る所

●『逆賊』君に反逆せる賊徒を云ふ

月に白波霧立ちて瀨をまく流れ滔々と渦捲き返へす筑後川菊池の勢は何ん無くも颯と計りに打ち渡り敵陣さしてぞ攻めかゝる武光其の日の扮立は黑革縅す鎧には青地錦の直垂着し鹿毛なる馬に打跨り軈て鞍坪につ立ち上り大音聲君に仇なす不敵の逆賊家のためには父兄の讐敵いざ今日の合戰に君に捧げし此の命捨てゝ武名を殘すべし進めや〳〵者共と延壽國村が鍛えたる大太刀眞向に振りかざし簇がる敵に突いて入り

●『縱横無碍』敵軍を縱横十文字にさゝふるもの無き如く駈け破る戰況なり

●『鍋を削る』鍋は刀のむねに高く擧えたる筋にてはげしく戰ふ時は鍋を削ると云ふ以下四五句は戰況なり。

●『阿修羅王』佛敎に曰ふ月法を滅ぼさんとする力强き惡魔の事

當るを幸ひ薙伏せ切倒し　縱横無礙に切り靡け
敵も名に負ふ足利勢　合戰烈しく打つ太刀の
しのぎを削る鍔の音　轟く駒の足並も
揃ひ兼たる敵味方　鎗は閃く電に
朱の千條の瀧津瀨か　雨と降り來る矢玉の中を
物ともせざる武光は　阿修羅王の荒れたるが如く
いと勇しく戰ひしが　篠つく如き敵の矢に
馬は斃れて詮方なくも　双向ふ騎武者を斬てすて
馬を奪ふて打乘りつゝ　又八方にかけまはる
强將の下に弱卒なしとかや　相從ふ八千の士卒

●『右往左往』右に往き左に往き不規律に散り行くさま

●『詩の大意』金鐵の忠義の心を多年磨いて鋒となし錬り鍛へたり中央の方面に向ひ進まんと思ふて先づ虎や狼の如き者共を殲したと云ふ意之は賴山陽の詩の句中に取れり

●『蛾』人を斬りたる血の刀につきたること

●『筑水』筑後川を指す

主に劣らじと心を合せ　荒れにあれてぞ戰へば
雲霞の如き敵軍も　菊池の勢に薙立てられ
開き靡きつ蛛蜘の子を　散らすが如くちり〳〵と
右往左往に亂れたつ

鐵心百錬磨爲鋒　欲向中原殲虎狼

勝に乘りたる菊池の軍勢　得たり應と罵りつゝ
足並亂して追ひかくるを　大將武光之を見て
長追ひ無用と呼び止めつ　軍を收めて引返し
莞爾と笑みつ急流に　蟻りたる太刀を清むれば
血汐走りて筑水の　流れを染めて花と散る

●『塒』鳥の寢る處をねぐらと云ふ
●『凱歌』かちどきを擧げて凱陣を祝ふ歌
●『阿蘇の高根』肥後國阿蘇郡に在る噴火山なり
●天津日『單に日と云ふに同じ天津は天空の義

時しも夕陽傾きてねぐらを急ぐ百鳥の
聲も凱歌を壽ぶきて高良の陣へと歸りけり
噫筑後川の功績は例も稀に菊池方
譽は高く今の世に阿蘇の高根と彌高く
立ち登るらん天津日も國に盡せる武士の
眞心深き色そへて赤き光は千代までも
四方の海邊に輝きて青史に美名を傳ふらん
青史に美名を傳ふらん

大正十年十二月廿三日印刷
大正十年十二月廿六日發行

正價金貳圓（郵稅六錢）

不許複製

著作者　東京市麹町區一番町三十四番地　早川紫陽
發行者　東京市麹町區一番町三十四番地　橘旭翁
印刷者　東京市芝區南佐久間町二丁目十四番地　渡邊素一
印刷所　東京市芝區南佐久間町二丁目十四番地　內外印刷合資會社
發行所　東京市麹町區一番町三十四番地　振替貯金口座東京一七五九一番　筑前琵琶宗家

11
137

11
537

終